

令和6年度



交通安全 ファミリー作文 コンクール



警察庁

令和六年度交通安全ファミリー作文コンクール優秀作品集の発刊に当たつて

皆様には、日頃から交通安全活動に御尽力をいただいておりますことに對し、厚く御礼申し上げます。

さて、昨年の交通事故による死者数は、二千六百六十三人で、前年と比較して十五人減少いたしました。

しかしながら、今なお多くの尊い命が交通事故で失われていることには変わりなく、次代を担う子どもが犠牲となる痛ましい交通事故や、飲酒運転をはじめとする悪質・危険な運転による重大な交通事故も依然として後を絶ちません。政府が目標とする世界一安全な道路交通を実現するためには、各界各層の一層の連携した取組が必要と考えております。

交通事故は、国民の誰もが当事者となるおそれのある身近な問題です。安全で快適な交通社会を実現するためには、国民の皆様一人一人が交通ルールを守り、自動車や自転車の運転者、歩行者がそれぞれ相手の立場に配慮し、思いやりの気持ちをもつて交通マナーを実践していくなど、積極的に交通安全に関わっていくことが大切です。

「交通安全ファミリー作文コンクール」は、家庭、学校、地域等において交通安全について話し合ったこと、また、これらを通じて思ったことや感じたことなどについて、作文を通じて国民の皆様が共有することで、具体的な交通安全活動の実践につながる取組として四十六年の永きにわたり続いてまいりました。

今年度も小学一年生から中学三年生まで四千五百六十点の応募をいただきました。

本書は、その応募作品の中から、最優秀作（内閣総理大臣賞）をはじめとする優秀作品をまとめたものです。この作品集を通じて、国民の皆様が交通事故のない社会を願う気持ちを共有し、そのことが更なる交通ルールの遵守と交通マナーの向上につながることを心から期待しております。

結びに、本事業の実施に当たり、御協力いただいた関係の方々に厚く御礼申し上げます。

令和七年二月

警察庁交通局長 早川智之

^\u76f8\u5e02^

警察庁

一般財団法人

全日本交通安全協会

公益財団法人

三井住友海上福祉財團

一般財団法人

日本交通安全教育普及協会

^\u52d6\u53d6^

内閣府

文部科学省

^\u548c\u53d6^

全国共済農業協同組合連合会（JA共済連）

目次

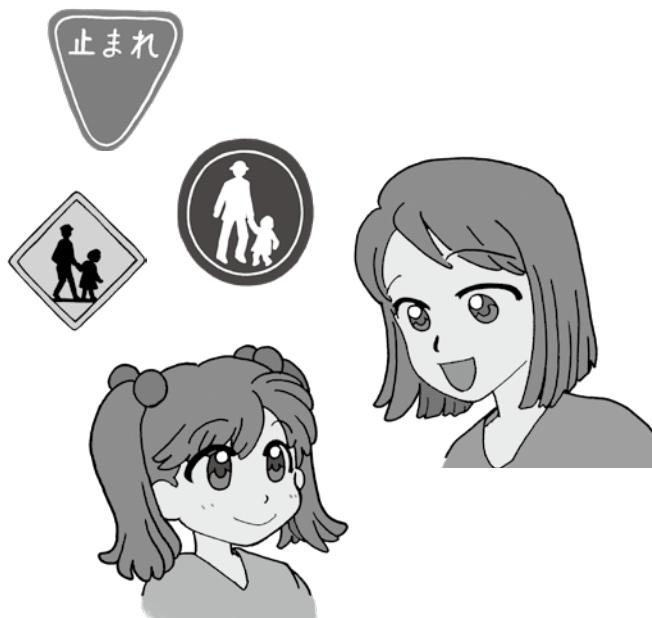
《小学生の部》

わが家のルール	9
長崎県長崎市立日見小学校	四年 大木 梨音
命の重み	10
愛媛県松山市立宮前小学校	五年 藤渕 悠玄
命を守るヘルメット	11
福井県坂井市立東十郷小学校	六年 小藤 栄磨
優秀作「文部科学大臣賞」	12
ぼくのおうだんほどうのわたり方	13
熊本県天草市立本渡南小学校	二年 酒井 宗佑
安心してくらせるまちへ	14
香川県観音寺市立観音寺小学校	三年 松本 葉奈
佳作「警察庁交通局長賞」	15
おうだんほどう	16
鹿児島県鹿児島市立春山小学校	一年 有村 純真
最優秀作「内閣総理大臣賞」	17
つながれわたしのありがとう	3
千葉県我孫子市立我孫子第四小学校	三年 永野 太鳳
優秀作「国務大臣・国家公安委員会委員長賞」	18
うんてんちゅうのスマホ	5
千葉県千葉市立小倉小学校	一年 松隈 唯
気もちのちがいがじこのもと	6
福井県福井市安居小学校	二年 横山 凌央

横断歩道でコミュニケーション	32	油断したその先は	46
岐阜県各務原市立蘇原第一小学校	六年 西濱 千紘	鳥取県米子市立淀江中学校	二年 長谷川 純
審査を終えて〔小学生の部〕	34	誰もが交通社会の一員	48
宮田美恵子		栃木県宇都宮大学共同教育学部附属中学校	三年 岩佐 葵
命を守るヘルメット	43	優秀作〔文部科学大臣賞〕	
広島県福山市立城北中学校	三年 新田 晓	思いやりの注意	
最優秀作〔内閣総理大臣賞〕		愛媛県松山市立南中学校	
命を守るヘルメット	43	佳作〔警察庁交通局長賞〕	
香川県高松市立山田中学校	一年 片山ほのか	もしあの時ヘルメットがなかつたら	51
優秀作〔国務大臣・国家公安委員会委員長賞〕	45	兵庫県神戸市立白川台中学校	一年 庄司 礫
大切な家族の命を守るために		思いやりをつくる交通安全	
富山県富山市立水橋中学校	一年 廣野琥太郎	富山県富山市立水橋中学校	一年 廣野琥太郎
52	52	52	52

姉の自転車通学と交通安全	群馬県前橋市立箱田中学校	一年	安原	思惟	54
とみもまた	東京都共立女子中学校	二年	阿部	帆夏	55
安全へ繋ぐささやかな敬意	千葉県柏市立柏中学校	二年	小柏奈帆子		56
一人ひとりから始まるもの	埼玉県新座市立新座中学校	三年	新井	広子	58
決意の夏	山口県下関市立木屋川中学校	三年	中村	輔	59
審査を終えて〔中学生の部〕	鈴木 春男	62			

小学生の部



最優秀作 内閣総理大臣賞

千葉県我孫子市立我孫子第四小学校

三年 永野 太鳳

つながれわたしのありがとう

「運転手さんにちゃんとお礼を言おうね。せーの、ありがとうございました。」

道路をわたる時に止まつてくれた車には、かならずふり返つておじぎをしてお礼を言うようと、お母さんはまだ小さかったわたしに教えてくれました。ちゃんとお礼を言うと、両親がとてもほめてくれたので、わたしはそれがうれしくて出歩く時は車が止まつてくれるとはりきつてお礼を言つていました。

しかし、小学生になつてから少したつと、わたしは止まつてくれた車にお礼を言うことをしなくなつてしましました。他の小学生や大人たちには、同じようにしてい

る人はいなかつたので、わたしだけがふり返つておじぎをしていることがだんだんと「はずかしいな」と感じようになつてきたからです。

「お母さん、わたしは止まつてくれた車にお礼を言つていたけれど、周りの人たちはそんなことはしていないし、わたしだけがやつているのがさい近はなんだかはずかしいんだ。」

ある日、わたしは少しゆう氣を出してそう言つてみました。がつかりするかな？おこられるかな？などと思いましたが、お母さんの言葉はわたしの予想とはちがつていました。

「車が止まつて歩行者を待つことはルールだからお礼を言うひつようはないと思つてゐる人はたしかにいるね。でも、ありがとうを言われていやな気持ちになつたことはある？」

「ないよ。うれしくて、気持ちがスッとする。」

「そうだよね。ありがとうございますすごい力があるんだよ。あなたの感しやが運転手さんをうれしくさせて、次もまただれかのために止まつてくれる。止まつてくれた人もうれしくなる。そうやってありがとうの気持ちが名前も

知らないだれかにつながつていくんだよ。」

それを聞いた時、わたしのお礼に手をふつてくれたり、え顔を返してくれた運転手さんたちがいたことを思い出しました。その後もまだれかのために止まつてくれたり、らんばうな運転をしないように気をつけようと思つてもらえたなら、わたしのおじぎとお礼が交通事こをふせぐことに役立つかもしれません。そう思うと急にムクムクとやる気がわき上がつてきました。

それからわたしは前よりも、もつとはりきつてお礼を伝えることにしました。そうすると、おどろいたことにわたしがお礼をしているのを見た小さな女の子がまねをして、車に「ありがとう。」とおじぎをしていました。「わたしの行動があの女の子につながつたんだ。」やる気のパワーをじゅう電してもらった気持ちになりとてもうれしくなりました。

みんなでありがとうの気持ちを伝え合えば交通事このない安全な町をきずいていけると思います。今日も、明日も、その先も小さな「ありがとう。」をわたしからどんどん発しんしていきたいです。



優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

千葉県千葉市立小倉小学校

一年 松隈唯

うんてんちゅうのスマホ

わたしのおかあさんのおなかのなかにはいまあかちゃんがいます。おとこのことです。あかちゃんがうまれることをかぞくみんなでたのしみにしています。あかちゃんがうまれるときはおかあさんはびよいうんにおとまりするときいています。

でもあかちゃんがうまれるよていのひよりずっとまえに、おかあさんはびよいんにおとまりすることになりました。くるまをうんてんしているときに、うしろからぶつかってきたるまがいて、じこにあつてしまつたからです。スマホをみながらうんてんしていたひとがぶつかってきたとききました。

「なんでスマホをみながらうんてんしていたのかな。」
おとうさんやおとうどとはなしました。どうしても、うんてんちゅうにスマホをさわらないといけなかつたのかな。なにかれんらくをいそいでいたのかな。おとなにはいろいろなりゆうがあるのかもしれないけれど、わたしはもうこんなじこはいやだなどおもいました。

「シートベルトつけたかな。しゅっぱつ、しんこーう！ レツツゴー！」

いつもうんてんせきからおかあさんがいつてくれるいいことばです。おかあさんはじこのあと、きをつけてうんてんしていてもじこはおきてしまうことがあるから、

かならずシートベルトをきちんとつけようとはなしてくれました。

わたしは、スマホをみながらうんてんすることでおきるじこがなくなつてほしいです。うんてんちゅうにはうんてんにしゅうちゅうして、スマホをみることをやめて、まわりをきをつけてみてもらいたいなどおもいます。

福井県福井市安安居小学校

一年 横山 凌央よこやま りょうおう

気もちのちがいがじこのもと

ぼくのおかあさんが、あさしごとに行くみには、学校が二つあります。そこをおかあさんは、とく大きけんスポットとよんでいます。ときどき、こんなあぶないことがあった、あんなこわいことがあった、と話していく、ぼくに気をつけろと言つてきます。

ぼくはいつもこう通ルールをまもつて学校に行つています。だから、どうして学校の近くだからといって、き

けんなんだろうと思いました。ぼくがまもつているルルは、あるいているときは、白線から出ない。車が通るみちに出るときは、一ど立ちどまる、の二つです。おかあさんにそれを言うと、
「みんながそれをしてくれると、うんてんしゅもんじゃないからね。」

と、言いました。

「それに、うんてんしているときには、あるいている子が、つぎにどんなこうどうをとるか、よそうがつかないこともあるからね。」

とも言いました。

ある日、おかあさんがしごとに行くときに、じてんしゃの中学生がよこみちからきゅうにやつてきて、車の前をおうだんしないでカーブして行きました。中学生は車の前をおうだんするつもりはないから、スピードをおとさずに近づいてきましたが、うんてんをしているおかあさんは、車の前にとび出して来ると思つてきゅうブレーキをかけてしんぞうがバクバクしたそうです。

これを聞いて、ぼくは中学生とおかあさんの気もちが

ちがうことが、きけんになつてているのだとthought。

だからぼくは、気もちのちがいをなくすと、じこがおこりにくくなるthought。

じてん車やあるいてる人は、つぎにそつちに行くよ、という気もちをうんてんしゅに知らせるために、一ど立ち

どまつたりすることが大切で、うんてんしゅは、じてん車やあるいてる人がこつちに来るかもしけないと、ずっとよそうしてうんてんすることが大切だthought。

「だつて、じてん車にウインカーはついていないしね。」

と、ぼくが言つたら

「あ、本どうだ。あればいいのにね。」

と、おかあさんははつとして、おどろいていました。

ぼくはあるくとき、車が通るみちに出るときは一ど立ちどまつていたけれど、もつとうんてんしゅに、ぼくがつぎにどつちに行くかわかるように気もちをこめて、とまりたいなと思いました。

うしました。

それから二年たつて、三年生になつてからは、車へのきようふ心もだんだんと少なくなつています。しかし、今でも、マナーのわるい車を見ると交通じこのことを思

香川県観音寺市立観音寺小学校

三年 松本 まつもと 茉奈 かなな

安心してくらせるまちへ

私は、一年生の時に、交通じこにあいました。横だん歩道をわたつていた時に、相手のふちゅう意ではねられました。わたしは、けがをして、とてもいたかったです。そのきずあとは、まだのこつてあります。おい者さんからは、「このきずは、ずっときえません。」

と言われました。交通じこにあつてから、車を見ると、こわくなつてしまします。学校も、一人で歩いて行くことができなくなりました。それから、毎日お母さんに送つてもらひながら、登校するようになりました。車を見ただけでも、泣いてしまう日もありました。遠足も、先生と手をつないで歩き、横だん歩道をわたる時は、きんちようしました。

い出します。今日も、信号むしをする車を見ました。と
てもあぶなくて、きけんだと思いました。登上校中、横
だん歩道をわたっているのに、車がそのままつつこん
で来ることもあります。歩行者をゆう先せずに車を運転
している人は、気をつけてほしいです。けいたい電話を
そうさしながら運転している人もよく見かけます。交通
ルールやマナーを守らないことで、大切な命がなくなっ
ているのです。そして、私のように、命は助かっても、
そのきずや、心のいたみがさえずに苦しんでいる人もた
くさんいるはずです。

交通ルールは、ぜつたいに守らないといけません。車
のこわさ、自転車のこわさをもつと考えてほしいです。
香川県は、全国できにも、交通じこが多い県だと聞きました。
した。子どもも、はたらく人も、お年よりも、みん
なが安心してくらせるまちをつくるためには「少しくら
い大じょうぶ」「ばれなかつたら大じょうぶ」「いつもの
道だから大じょうぶ」と思わず、ふちゅう意の原いんを
なくしていくことが大切だと思います。

私は、歩行者としてちゅう意しています。道を歩く時
は、車道に出ないように、なるべく右がわを真つ直ぐ歩

くようしています。信号機が点めつしたら、横だん歩
道をわたらず、下がつて止まるようにしています。交
差点では、左右をよくかくにんしてから、手を高く上げ
てわたります。細い道で車が通る時は、立ち止まつて通
りすぎるのを待ちます。

これからも、「自分の命は、自分で守る」の言葉をむねに、
気をつけて生活していきます。そして、「大切なだれかの
命も、みんなで守る」ことができたら、交通じこは、なくなつ
ていくと思います。心のふちゅう意をなくし、みんなが交
通安全にちゅう意して、安心してくらせるまちになるよう
に、わたしも呼びかけていきたいです。

わが家のルール

四年 大木 梨音

るのです。

私は、夕焼けの空が一番好きです。日がしづみ、オレンジ色からだんだん暗くなる、この世界観に心をうばわれるからです。また、雨がふり出しそうな空も好きです。辺りはうす暗く、なんとなく雨のにおいがしてきます。そんなひとときに、愛犬と散歩するのが楽しいです。愛犬も散歩が大好きで、うれしそうに私の顔を見上げます。「風が気持ちいいね、空がきれいだね。」そんなことを話しかけながら、歩いています。しかし、夕方は車がたくさん通り、道がせまい場所もあって、車が私のすぐ近くを通つてひやひやします。夕ぐれ時は、一日の中で歩行者が死ぼうする交通事故が多い、きけんな時間帯だそうです。また雨の日は、し界が悪くなり、道路がぬれたことで車がスリップし、事こを起こしやすいそうです。いつ事こにあうかは、だれにもわかりません。しかし、交通ルールを正しく守ることで、事こをふせぐことができ

私は、犬の散歩において、家族と話し合つて決めた約束事があります。それは、次の四つのことです。一つ目は、必ず母といっしょに行くことです。夕方といつても、私だけで外出するのはあぶないので、母と散歩に行きます。二つ目は、ライトを持つて行くことです。ライトがあれば、ドライバーがいち早く歩行者に気付くことができます。三つ目は、車が通る時は、犬の方を向いて横向きに立つて止まることです。横向きになることで、体の面積が小さくなり、車が通りやすくなります。またかべを作ることで、犬の飛び出しをふせぐことができます。四つ目は、万が一事こにあつた場合、近くの大人に助けを求めることがあります。母が対応できればいいのですが、私しか動けない場合、自分で助けを求め、きちんとじようきようを説明できなければなりません。事こにあつた場合、あせつてしまい、正かくなじようほうを伝えられなくなるかもしれません。私の家では、日ごろから順じよ立てて話をする訓練をしています。そうすることで、いざという時、要点をつかんで話すことができます。私は、ずっとこの四つの決まりを守っています。

車を運転するためには、自動車学校に通い試験に合格

くして、運転免許を取らなければいけません。しかし私達歩行者は、歩くための免許を取らなくてはなりません。交通事故にあわない

ために、どうすればいいのか自分で学び、実験することが大切です。私はこれからも、交通ルールを正しく守り、犬の散歩を楽しもうと思います。散歩をすることは、全身運動になつて健康に良く、ストレス発散にもなります。また愛犬とのきずなも深まり、一石二鳥です。老犬ですが、愛犬が少しでも長生きできるように、夕焼け空の散歩を大切にして、歩いて行こうと思います。

して真剣な声で、

「対向車が横から出てきた自転車をはねた。一切動かない。誰も電話してない様子だし、電話する。生きているといいけど…」

と、車内から電話をかけ始めました。その時、弟は寝ていて、お母さんは見てなくて、僕も見えなくて。お父さんが降りて近づき、様子を説明していました。はねた運転手さんも車から降りていて、でも顔が真っ白で、何もしゃべっていませんでした。その車には赤ちゃんと女の人も乗っていました。まつたく動かない道路に倒れた男の人は、周りの人から、

「お兄さん、頑張れ！もうすぐ救急車くるよ！頑張れ！あとちょっと！」

と、口々に励まされていました。日帰り旅行で楽しい気分だったのに、僕は今までにないくらい、ドキドキして、頭と心の中が一気にぐちゃぐちゃになりました。不安と心配で怖くなりました。警察官と救急隊員の人たちが来て、僕たちもようやく家に向かつて出発しました。

それまで、親に「危ないから飛び出さないでね」や「道路は気をつけて」と言わなくても、その言葉を軽く考えて

命の重み

愛媛県松山市立宮前小学校

五年 藤渕 悠玄

去年の四月末、家族で遠出した帰り道、運転していたお父さんが突然、車を道の横に寄せて停止しました。そ

いました。あの日以来、目に焼き付いて慎重になりました。事故が起きると、被害者、加害者、目撃者、みんなが大変になることがわかつたからです。命は大事とわかっていても、どこか実感できていなかつた僕は、初めて命の重さを心から知りました。あの日、気になつて、ニュースを探しました。僕たちが目にした事故は、「頭を強く打ち、意識不明の重体」と流れています。その後もずっと気になり、何度もネットを探していましたが、意識不明の重体から元気になつたかどうか、今もわかりません。

一瞬の出来事で人生が大きく変わります。加害者も被害者も、いつ誰がなるかわかりません。僕は弟に、道路での安全をたびたび言うようになりました。運転する親にも、今まで安全運転で別の車に抜かされた時「遅い」と文句言っていたのが、今は「もつとゆっくり」と反対のことを言うようになりました。道を横断する時は、信号機があつてもなくとも、手をあげるようになりました。それは、僕の命を知らせる大切な合図だからです。そうすることは、待つてくれている家族の安心と幸せにつながることもあるからです。加害者をつくらないことに

もなると思います。事故を見た後、車内でいっぱい話し合いました。誰の命もひとつだけで、尊くて、守らないといけないことを再確認しました。自分の命は自分で守る、それは自分のためでもあり、僕を宝ものに想つてくれている人たちのためでもあります。世の中から交通事故が無くなるように、僕は今日も願います。

福井県坂井市立東十郷小学校

六年 小藤 こうま

命を守るヘルメット

「めんどくさいでかぶらーん。」

とか、「カツコ悪いでかぶらーん。」

とか、そのような声がぼくのまわりでもよく聞くことがあります。

去年の四月から、自転車を乗る時はヘルメットをかぶることが努力義務になりました。ぼくの小学校では、学校ルー

ルで自転車に乗る時は必ずヘルメットをかぶるルールに決まっています。だから、ぼくも本当は少し恥ずかしい気持ちもあるけれど、必ずヘルメットをかぶつて自転車に乗るようになっています。

ぼくのお母さんの弟は、小学校三年生の時に自転車に乗っていて、大きな道路に飛び出して、交通事故にあいました。意識不明の重体になつて、何度も大きな手術をしたそうです。なんとか命は助かりましたが、おじさんは今は車いす生活だし、脳にも障害がのこっています。もしも、おじさんが子供の時にヘルメットをかぶつて自転車に乗っていたら、事故にあつてしまつたとしても、ここまで大変なことにはならなかつたかもしれません。頭は体の中でも一番大切なところなので、そこを守つていたらちがつたのかもしれません。

おじさんが子供の時にヘルメットをかぶることが義務だつたら、みんなきちんとかぶつていたと思うので、とても残念に思います。

みんな、めんどくさいとか、カッコ悪いとか、恥ずかしいとか、そんなくだらない理由でヘルメットをかぶらないで、大変なことになつて後かいしても、おそいということ

を分かつてほしいです。お母さんはその気持ちがだれよりもよく分かつていて、ぼくにヘルメットの大切さと必ずかぶるようにしつこく言つてきます。なので、ぼくも、自分のために、家族のために、みんなのために、必ずヘルメットをかぶります。

今はまだ、法律では努力義務だから、絶対かぶらなければならぬわけではないから、ぼくのまわりでもかぶつていない人もいるけれど、早く絶対かぶらなければいけない法律になればいいなあと思います。そうすれば、恥ずかしいとか関係なく、みんなきちんとヘルメットをかぶると思うし、もしも交通事故にあつてしまつても、かるくすむこともあるかもしれないし、そうすれば悲しい思いをする人もへるのではないかなど思います。

自転車の人がヘルメットをかぶるだけで、交通安全になるとは思わないけれど、車を運転するお父さんやお母さん、おじいちゃんおばあちゃんたちは本当に気を付けて、よそ見などや居ねむりなどしないように運転してほしいし、道踏をわたる人は、安全確認をしつかりしてわたつてほしいし、みんな自分ができることをしつかりして、みんなで交通安全に気を付けて、事故のない安全な世界になつて、辛

い思いや悲しい思いをする人がいなくなるといいなあとと思
います。



優秀作

文部科学大臣賞

熊本県天草市立本渡南小学校

二年 酒井 宗佑

ぼくのおうだんはどうのわたり方

どうしたら、じこにあわないか家ぞくと話しあいました。
そのけつか、車がとまっているかたしかめることでした。

とまっている車をどうやってたしかめていますか。ぼく
は、耳で音を聞きます。ぼくがどうろをわたつていなくても、
車がとまっているか考えています。こうさ点は、耳で聞い
て、たてに車がうごいているか、よこに車がうごいている
かたしかめています。みちをわたらぬときは、点字ブロッ
クの上をあるいています。点字ブロックにかかとをそろえ
てわたらとまつ直ぐあるくことができます。

学校のじゅぎょうでは、先生に手びきをしてもらつて
どうろをわたるれんしゅうをしています。先生から

「おとうさんか、おかあさんに手びきをたのんでみてください。」

といわれたので、ぼくが家にかえつて
「手びきおねがいね。」

とおねがいしました。家ぞくとあるいていどうしている
ときに後ろから車がきていました。たて
のみちから車がきているなあと思いながら、

「今、後ろから車がきていいね。」

といいました。そうしたらおかあさんが

「前からもきているよ。」

とこたえてくれました。ぼくは、しんごうが見えていま
せん。かくにんしないと車とぶつかってしまします。だ
から、耳で聞くことがだいじだなと思いました。

今は白じようをつかわずに、だれかといっしょに手を
つないであります。だから、いつか白じようをもつ
て一人であるいてみたいです。

ぼくは、このように車の音を聞いて、点字ブロックに
足をそろえて、おうだんはどうをわたっています。耳が
ぼくのしんごうです。これからも、車の音を聞いておう
だんはどうをまつ直ぐわたりたいです。

佳作

警察庁交通局長賞

鹿児島県鹿児島市立春山小学校

一年 有村 総真

おうだんはどう

ぼくは、ことしのしがつにしようがくいちねんせいになりました。

がつこうへはあるいてかよっています。どうこうは、と
うこうはんのみんなと、げこうはおなじいきのおともだ
ちといっしょです。がつこうへのみちはすこしまくさき
がみえにくいところもおおいです。くるまもたくさんとおつ
っています。みちにひるがらないようにはどうのはくせんの
うちがわをあ起き、おしゃべりにむちゅうにならないよう
にまわりをよくみると、きをつけています。
はじめてのことがおおくて、さいしょはすこしきんちよ
うしていました。でもみんなとどうげこうをくりかえして

いくとだんだんきんちょうもすくなくなつていきました。

がつこうせいかつにもなれてきたあるひのげこうちゅ

うに、おうだんはどうをわたらうとしたらまがつてきたりくるまがすごいきおいでせまつてきてきゅうぶれーきでとまりました。おうだんはどうのしんごうはあおだつたのでぼくはとてもびっくりしました。いえにかえつておかあさんにおうだんはどうでのはなしをすると、とてもおどろいてけががなくてよかつたといつてくれました。そのあとになにがげんいんかおしえてくれました。おうだんはどうがあおのとき、おなじむきのくるまのしんごうもあおなのでまがつてくるまがいるそ�です。なのでおうだんはどうのしんごうがあおだからくるまがこないとおもつているとあぶないとおしえてもらいました。いままでもおうだんはどうをわたるときにはちゃんとみぎひだりをみてわたつていましたが、いままでいじょうにきをつけたいとおもいました。

とうげこうになれていたのですこしきがゆるんでいたかもしません。こうつうじこにあわないよういろいろなことにきをつけたいとおもいました。

大分県大分市立野津原小学校
一年 竹山 明里たけやま ひかり

てあげておうだんはどうをわたります

わたしは、ことし1ねんせいになりました。こうつうしどういんになつたおかあさんと、あるいて、しようがつこうにかよっています。

がつこうまでのみちで、スピードをだしてはやいくるまはこわいです。スマホでよそみをしているくるまのひとがおおいです。

おうだんはどうで、まつてているのに、くるまがとまりません。こうつうしどういんの、おとうさんとおかあさんが、たつてとめてくれると、すぐくるまがとまりわかれます。

まいにちけいさつのひとが、たつてくれたら、すぐにくるまがとまつて、みんながわたれるのになあーとおもいます。わたしが、あおしんごうで、おうだんはどうをわたつてるとき、くるまとくるまがぶつかりました。とてもこわかつたです。

こうつうしじういんの、おとうさんとおかあさんが、

おうだんほどうをわたるときに、いうことばがあります。

「てあげて、おうだんほどうをわたりましょ。」

です。わたしは、いつもてあげてわたります。

わたしのおにいちゃんは、てあげてどうろをわたつ

ていました。でも、スピードをだして、よそみうんてんの、

おじさんのくるまに、ひかれてしましました。

だからわたしは、おにいちゃんにあつたことがあります。

せん。いえに、しゃしんがいっぱい、かざつてあります。

あいたかつたのに、おにいちゃんにはあえません。かわ

いそうです。しんだらもどらない、かなしいです。

おそらくで、おじいちゃんとおばあちゃんと、うさぎさ
んとかえるさんと、おつきさまのなかで、いつしょにも

ちつきをして、たのしくたべているとおもいます。

100ねんご、あいにいきます。それまでこうつうあ

んぜんをして、まいにちてあげて、おうだんほどうを

わたります。

くるまのはとは、とまつてください。スピードうんてん、

よそみうんてんは、しないでください。おねがいします。

おこさず、あわづ、じこゼロに!!

茨城県下妻市立下妻小学校

一年 谷古宇 楓やこうち かえで

てをつなごう

「てをつないでからいこうね。」

ちいさいころから、そとにでるときはおかあさんにい
われていました。

でも、ぼくがまだほいくえんせいのときに、やくそく
をやぶつて、ほいくえんのちゅうしやじょうでかつてに
くるまのドアを開けて、ほいくえんのもんまではしつて
いこうとしたことがあります。

「あぶないよ。」

と、おかあさんにおこられました。そのときは、どうろ
じやないのになんでおこるんだろうとおもいました。

しようがくせいになつて、おかあさんといっしょにお
とうとのほいくえんのおむかえにいったとき、おとうと
がはしつてもんからでようとしました。ぼくがおいつい
て、おとうととてをつなぎました。

そのとき、ほいくえんせいのときにおかあさんにいわ

兵庫県加西市立宇仁小学校

二年 鷹取 遵
たかとり まもる

ぜつたいにわたれないおうだん歩道

「ほら。やつぱり、車なんかこなかつた。」

ぼくは、そう思った。それなのに、近道できてうれしい気もちと、やすくをやぶつてくるしい気もちとで、とてもふくざつだった。ぼくの家から小学校に行くと中に、そのおうだん歩道はある。そこをとおれば、小学校まで歩いて三分、自てん車にのれば一分で行ける。一人の近道だ。だけど、パパはぜつたいにわたさせてくれない。

パパがすすめてくる道は、かんたんに言うとつう学ろだ。いつたん小学校からはなれて、歩道きょうをわたるから、歩いて五分い上かかるし、自てん車では行けない。小学校につくころには、つかれてあそぶパワーがなくなっている。ぼくはなんどもはんろんした。おねがいしたり、おこつたり、近道のよいところをつたえた。だけ

れたことをおもいだしました。ちゅうしゃじょうは、くるまをとめるのにバックするときがあるからとてもあぶないこと。ちいさいこは、くるまのしかくといいうものになつてしまつてみえないことがあること。くるまはきゅうにとまれないこと。

それからぼくはそこにでるときは、

「にいにとてをつないで、ゆつくりいこうね。」

と、おとうととやすくをします。

ぼくは、おとうさんとおかあさんがぼくのてをぎゅつとしてまもつてくれたみたいに、おとうとのてをぎゅつしてまもつてあげたいです。

そして、こうつうあんぜんのこともおしえてあげたいです。

パパがすすめてくる道は、かんたんに言うとつう学ろだ。いつたん小学校からはなれて、歩道きょうをわたるから、歩いて五分い上かかるし、自てん車では行けない。小学校につくころには、つかれてあそぶパワーがなくなっている。ぼくはなんどもはんろんした。おねがいしたり、おこつたり、近道のよいところをつたえた。だけ

どいつもパパは、

「かならず歩道きようをつかいなさい。」

と、言つた。

なぜそのおうだん歩道をわたらせてくれないかといふ
と、U字カーブのてっぺんにあるからだ。見とおしはか
なりわるい。だけど、あまり車も人もとおらないので、
たまに来る車はスピードを出している。だからぜつたい
にわたさせてくれない。

でも、ぼくは一回だけそのおうだん歩道を内しよでわ
たつた。その日ぼくは、お友だちと小学校のうんどう
じょうでまちあわせをしていた。行くと中、歩道きよう
の上から道ろを見て、「ほら、やっぱり車なんかこなかつ
た。近道したらとっくに小学校についているのに。」と、
ちよつとイライラした。夕方までクタクタになるほどあ
そんだかえり道、ぼくは、はじめてそのおうだん歩道を
わたつた。ちゃんと右左を見て車が来ていないのをかく
にんしたし、いそいでわたつた。近道できたはずなのに、
やくそくをやぶつてふくざつな気もちで歩く道は、いつ
もよりとつても長くかんじた。家にかえると、げんかん
の前で見ていたパパはカンカンにおこつていた。

「タぐれは、歩行しやがいつもより見にくく。たまた

ま今日は車が来なかつたけど、車が来たらあぶないから、
つぎからぜつたに歩道きようをわたりなさい。」

と、言つたパパの顔は少しかなしそうにも見えた。

そのとき、「もしも」を考えた行どうをしないといけ
ないと思った。もしもスピードのはやい車が来たら、も
しもぼくに気づかず止まらなかつたら、もしもぼくがと
中でこけてしまつたら、きっとぼくはじこにあうと思う。
そうなれば、家ぞくみんなにかなしい思いをさせてしま
う。よりあんぜんな道があるなら、そつちをえらばない
といけないと思った。

あの日からぼくは、そのおうだん歩道をわたりたいと
は思わないし、ぜつたいにわたらない。だれかに見られ
ていなくても、車がこなくとも。

二年 瀧口 理紗子

「とび出しちゅうい」 気をつけて

わたしのおじいちゃんの家の前に、とび出しちゅういの男の子のかんばんがあります。小さいころは、元気な男の子のかんばんがなんであるのか、わかりませんでした。でもよく見ると、男の子は、はしっていることに気がつきました。きんじょのほいく園の入り口や、近くの家のガレージのかどにも、よくにたかんばんがおいてありました。

このかんばんは、たてものや、まがりかどから、子どもがとび出してくることを、じどう車やじてん車の人に気づいてもらうためのものだと、おじいちゃんに教えてもらいました。わたしやおとうとがあるけるようになつて、そとに出ることが多くなつたので、ホームセンターで買ってきました。おとうとや妹は、お出かけがうれしいと、はしつて家をとび出してしまって、いつもちゅういされています。わたしはじぶんで気をつけてい

るけれど、もつと小さい子は、すぐにわすれてとび出してしまうので、そとに出るときはとび出さないように、声をかけたり、手をつないだりして、気をつけています。

わたしのおばあちゃんは小学三年のころ、じてん車にのつたおじさんに、足の先をひかれたことがあります。

おじさんは、子どもをしてん車の後ろにのせていてぶらついてしまい、おばあちゃんの足の先にのり上げてしまつたのです。あつ！いたい！と思ったときには、じてん車のおじさんは、とおくに行つてしましました。足の先におもたいじてん車がのり上げたので、しばらくいたかったそうです。この話を聞いて、いくら気をつけているいても、あぶないことはむこうからやつてくるんだと思いました。じどう車やじてん車の人も、みちをあらぐ人も、じこがおきないように、よく気をつけないといけないなと思いました。

とび出しちゅういのかんばんのほかにも、町の中にはいろんなどうろひょうしきやかんばんがあります。「とまれ」や「おうだんはどう」「スピードおとせ」「ふみきりあり」など、どれもじこがおきないようによびかけています。わたしはおじいちゃんとおばあちゃんの話を聞

いて、じこにあつてからではおそいんだなと思いました。

わたしがつづけていることは、おうだんほどうやみち

をわたるときに、右見て左見て、また右を見てわたることです。おうだんほどうでも車がとまってくれないとき

があります。そんなときはあわててとび出さず、まわり

をよく見てわたります。きゅうにとび出すと、車の人も

びっくりしてしまいます。じこにあわないようにするには、あるく人もうんてんする人も、どちらも気をつけな

いとだめだなと思います。「とび出しちゅうい」に気を

つけて、これからもみちをあるこうと思ひます。

と夏休みに学校の近くでまち合わせをして、友だちの家

に遊びに行く計画を立てました。家に帰つてそのことを

お母さんに伝えると、いっしょに自てん車で走つてみて、どんなきけんがあるか考えてみるとことになりました。

わたしはふだん出かける時は車にのつていて、自てん

車で出かけることはほとんどありません。自てん車で出

かける時は、お母さんかお父さんが前を走つて「右にま

がるよ。」「だんさに気をつけてね。」と声をかけてく

れます。だから、子どもだけで自てん車で出かけるには、

ちゃんと道をおぼえて、あぶないことには自分で気がつ

けるようにならなければいけません。

わたしが先頭になつて、いつもよりゆつくりと、まわりに目をくばりながら自てん車で走つてみると、ヘルメットをかぶること、信号をまもることなどのき本てきな交通ルールのほかにも、気をつけなければいけないとがあることがわかりました。

一つは、後ろのかくにんは止まつて足をつけてからすることです。自てん車をこぎながら後ろを見ると、バランスをくずしてこけそになるし、ふらついて車道に大きくなみ出すことがあります。とてもあぶないです。はみ出

してきた自てん車を、車があわててよけるのを何どか見

ました。

もう一つは、道路ぞいにあるちゅう車場にとまつてい

る車に気をつけることです。信号がないので、きゅうに

車が車道に向かつて動き出すことがあります。特に、後

ろ向きにとまっている車の運てんせきからは、見えるは
んいがとてもせまくて、自てん車が来ていることに気づ
かずに車道に向かつてさがつてくることがあります。

自てん車で出かける時は、自分ののり方だけでなく、
車の動きにもちゅういすることがひとつだとわかりま
した。少しでもあぶないと感じた時は、すぐに自てん車
をとめて安全をかくにんして、楽しく出かけられるよう
にしたいと思います。

茨城県下妻市立大宝小学校

三年 柴 鳩翔しば はやと

「死角」があると知った日

ぼくは、小学三年生です。

一人で自転車にのつて道路を走ることが出来るようにな
ります。ぼくは母に

「一人で自転車にのつて遊びたい。」

と何どもたのみました。でも道路を走る練習をしてから
にしようど、ぜんぜんのことが出来ません。

夏休みになり、ぼくは運転席、母は助手席にすわりサ
イドミラーを見ているように言われました。

びっくりしました。

後ろから歩いてきた父がミラーからきたのです。次
に小学一年生の妹に、車の前と後ろに立つてもらいま
した。前後とも小さくてかくれてしまい、すがたがぜんぜ
ん見えませんでした。それが「死角」と言うことを教え
てもらいました。そして、車のまきこみについても教わ
りました。「死角」に入つてしまふとどうなる?と聞か

れて、ひかれてしまったと思いました。「死角」に人がいるかをかくにんするには、運転手が目で見てかくにんするしかない。でも、かくにんしてくれる運転手ばかりではない。

その「死角」に颯翔がいたらじこにあつてしまう。

死んでしまうかもしない。一人で自転車にのつて道路を走るということは、自分で自分の身を守り車の動きを

かくにんして、運転している人の顔を見る。ぼくに気づいていない時は止まって待つ。これが守れないと自転車をきよかすることは出来ないと言われました。

運転をしていると歩行者、自転車はあたり前のように車のわきをすりぬけ、青しんごうでつつ走る人が多いと母から聞きました。かくにんをしてなかつたら、じこになつていたなと思つたけいけんが何度もあるそうです。右左折をする車、ちよくしんする自転車、いつしゅんの「死角」に入つていたらどうなるか。車を運転する人は、ぜつたいに目でかくにんしてください。歩行者、自転車は車の動きを目でかくにんしてください。

「死角」を知つてぼくはこわくなりました。これから自転車で道路を走る練習をして、きけんなことなどをべんきようしていこうと思います。

大阪府高槻市立阿武山小学校

四年 岩丸 ことは 琴葉

あなたは被つていますか？

安全確保を意識して生活している人は一体どれくらいいるのでしょうか。毎日街中を見ていて、人は身を持つて体験経験をしないと実感出来ないんだろうな、と私は思うのです。

二〇二三年四月から自転車のヘルメット着用が努力義務化になりました。スポーツバイクに乗つている人はヘルメットを被つているのに、シティサイクルに乗つている人は被らない人が多い。なぜ？自転車は軽車両扱いなので原則車道（例外はある）を走る。とても危ないと思うのです。ヘルメットを被ると暑いから？髪型が崩れるから？私もその一人でした。私は単に『めんどくさい』と思つていました。母によく、

「自転車時はヘルメット！チャリヘル！」（チャリ（自転車）ヘル（ヘルメットとヘルプ）を混ぜた造語）と言われ続ける毎日でした。

そんなある日、母と自転車に乗つて出掛けっていた時の事です。私は直進から左に曲がろうとした時、ブレーキのタイミングが合わず上手く曲がり切れずに目の前の壁にドーンとぶつかってしまったのです。私は転倒しました。唚然としました。そして心臓がバクバク冷や汗が出て来てとても怖くなりました。手と足を打撲、皮がめくれて出血していました。母が自転車を降り、すぐかけつけてきました。

「こっちゃん！大丈夫！？ちゃんと見てあげれてなくて

ごめんね！頭は打つてない！？」

私はハッとした。ヘルメットを被つていたので当然無キズでした。

「ヘルメット被つていたから大丈夫だよ」

私はその時思いました。『ヘルメット被つていなかつたらどうなつていいのだろう・・』『ヘルメットに命を助けられた』と言つても過言ではないと思いました。自転車事故で亡くなつた人の約七割が、頭部に致命傷を負つてているそうです。

ヘルメットを着用しないと死亡率が約三倍！これでもヘルメットを被らない理由はあるのでしょうか？もし事

故で大怪我をしたら、本人だけではなく家族や友人をも悲しませる事になる。それは絶対にあってはいけない事なのです。

私は今ではヘルメットは相棒だと思つています。自転車時だけではなく、通学の時にも被るうかな？と思つています。反射シールも貼つて、カッコ良さ倍増です！

私はこの経験をこの作文に書く事で、一人でも多くの人の目に止まればいいなど考えました。

毎日近所で自転車に乗つている人を見かけますが、ヘルメットを被つている人はほぼ見かけません。私は複雑な気持ちになります。声を大きくして伝えたいです。

『命より大切なものはありますか？後悔する前に、ヘルメット！』と。

私は今日も『チャリヘル』で自転車を楽しく、そして安全に乘ります！

兵庫県明石市立中崎小学校

四年 立花 樹たちばな たつき

がぬられています。

街の工夫とぼくができること

他にも工夫があり、目が見えない人のために信号機から音で知らせるようになっていたり、点字ブロックを運用してたり、車いすや歩くのがゆっくりな人のために青信号えん長ボタンがあつたりします。

あたり前のことのように見たり聞いたりしていた物だけど、全ての人が安全にくらせる街づくりがされているんだとあらためて知りました。

ぼくは今年、色覚検査を受けました。検査結果は赤色の見え方に少し異常があると言われました。「でも信号や標識はちゃんとわかっているし、大人になつたら車の運転免許も取れます。生活には大きな問題はありませんので大丈夫ですよ。」と病院の先生に言われました。

たしかに、小さいころから信号のことや横断歩道のわたり方など交通ルールはお母さんが教えてくれていたからわからないことも赤が理解できないこともなかつたです。

ぼく自身の症状が軽いものと言うのもあるかもしれないけれど、街の中にもいろいろな工夫がされているんだと調べて知りました。

標識などは色を間違わないように、にている色を使わないようにしてしたり、色がわからない人のために形やマークを利用して表現してありました。階段などの色が同じで段差のわかりにくい物にはふちの部分に明るい色

のようにしてたり、色がわからない人のために形や交通ルールを守り、マナーも守っていきたいと思います。

茨城県八千代町立下結城小学校

四年 古谷 ふるや 優月 ゆづき

わたしのお姉ちゃんははん長さん

わたしのお姉ちゃんは、今年から登校はんのはん長さんになりました。先頭に立つて歩くすがたを見て、かつこいいなといつも思います。そんなお姉ちゃんに、はん長として気をつけていることを聞きました。そうしたら、

「そんな大したことはしてないよ。」

と答えが返ってきました。でもわたしは知っています。歩いている時に、はんがはなれすぎないよう、いつも後ろを気にして下級生にスピードを合わせてくれること。車道がわにはみ出した時には、すぐに注意してくれたりします。家ではよくケンカもするけれど、はん長のお姉ちゃんはとてもかっこよくて大すきです。

お姉ちゃんと、どうすれば交通事故にあわないですかを話し合いました。その時にお父さんが、「小学生はどういった事故にあっているのか調べてみよう。」

と言い、茨城県けいさつ本部のホームページを見せてく

れました。いばらきの交通事故令和五年ばんを見てみると、十年前からくらべて、事故の件数はだんだんへつてきていますが、令和五年は、百七十四人の小学生が事故にあつていることが分かりました。その中で、自転車での事故は四十四人、歩行者の事故は二十五人でした。自転車事故の原いんは、じよ行い反、安全不かくにんが多く、歩行者の事故の原いんは飛び出しが多いということでした。そして、歩行者の事故は、登下校の時の、道路を横だん中に起ることが多いと分かりました。

茨城県の小学生の事故について調べてみて、自分たちは何に気をつければいいか、お姉ちゃんと考えてみました。登下校中の事故が多いので、しつかり前を向いて、一列で歩くようしたいです。そして、横だん中もあぶないので、信号が青になつてもすぐにわたるのではなく、右左右を見て、車に乗っている人に見えるように手をあげて横だん歩道をわたるようにしたいです。それと、自転車に乗る時は、ライトやベルをたしかめて、ヘルメットをきちんととかぶることをわすれないようにします。自転車事故は、出会い頭の事故が多いと書いてあつたので、スピードを出しすぎないで、曲がり角ではきちんと止ま

るようにはすれば、事故にあわないですむのではないかと思いました。

お姉ちゃんは六年生なので、登校はんでいつしょに学校に行くのも、もう少ししかありません。お姉ちゃんがいなくても、教えてもらつたことをしつかり守つて、交通安全に気をつけたいと思います。そして、もしわたしがはん長さんになることがあつたら、お姉ちゃんと同じように、しつかりしたはん長さんとして、下級生の安全を守りたいと思います。

でも、私が四年生の時、おじいちゃんが事故にありました。自転車に乗つていて車とぶつかり、車のボンネットから地面に落ちて、救急車で運ばれました。事故があつた場所は、家の近くで私もよく通る道でした。事故があつた時、私は家にいて救急車のサイレンが聞こえていましたが、まさかおじいちゃんが事故にあつているとは思わなかつたので、おばあちゃんから聞いた時とてもびっくりしました。おじいちゃんは、自分で歩いていて大丈夫と聞いた時、とてもほつとしました。

私は、ふだんから通つてている道で事故が起つた事におどろいたし、自分が気をつけていても、ある日とつぜん事故にあう事もあるんだなと思いました。

福島県西郷村立熊倉小学校

五年 阿部 楓

事故で失うもの

私にとって交通事故は、あまり身近なものではありますでした。ふだんから、道路を歩く時にはすごく気をつけているので、あぶない思いをした事も無かつたし、交通事故を見た事もありませんでした。

おじいちゃんは、見た目には大きなけがはありませんでしたが、体の色々な所にいたみや不調が出てしまい、何ヶ月も仕事に行く事ができず、しゅみの山登りやサイクリング、スイミングにも行けなくなつてしましました。たくさん検査をしたり、リハビリをしたりして、少しずつ良くなつて、できる事もふえてきたけれど、事故前のようにには今もまだもどれていません。

私は、交通事故で失うものは命だけではないと知りました。

兵庫県神戸市立御影小学校

五年 川内咲弥かわうち さや

歩行者優先！

した。それまでふつうにすごしていた日常も、ふつうではなくなってしまいます。一度、事故にあうと体だけではなく、心にも大きなきずができててしまうと思います。事故にあつた人の家族もとても悲しい思いをします。事故にあつた人だけでなく、事故を起こしてしまった人、その家族も同じように悲しい気持ちになると思います。悲しい思いをする人が少しでもへるといいなと思います。

交通事故を起こさないようにするには、自分が気がつけていればいいというわけではありません。歩いている人、自転車に乗っている人、車を運転している人、みんながルールを守って相手の気持ちを考えなければいけないと思います。

これからは、自分は事故にあわないだろうという考えはやめて、毎日通る道でも、どんな危険があるか、どんな事に注意すればいいのかを考えながら生活したいと思います。

「歩行者優先！」これは信号機のない横断歩道を渡る時にお母さんがよく言つてゐる言葉だ。「歩行者優先！」いつの間にか私のよく言う言葉になつていた。

夏休みが始まつてすぐのこと。近所の商業施設からの帰り道、「歩行者優先！」いつものようにこの言葉を信じて、信号機のない横断歩道を渡ろうとした時、私の目の前を車が平然と通過した。この出来事がこの夏の私の心に火をつけた。これが今から話す私の自由研究のきっかけだ。

この自由研究は、多くの人に交通ルールやマナーを知つてもらい、安全なまちづくりをめざすことが目的だ。

まず、私はお母さんと私の住むまちに信号機のない横断歩道がいくつあるのかを調べた。普段よく通る所、初めて通る所、全部で四十五カ所見つけることができた。そして、一つずつ写真を撮つてオリジナル交通マップを作つた。

次に、実際に信号機のない横断歩道で歩行者を優先する

車の台数を調査した。結果から交番の近くの横断歩道では歩行者を優先する車が多いことが分かった。このことから、ドライバーは警察の目を気にしていると予想できた。

その次にしたのは、兵庫県警察が推進している横断歩道合図（アイズ）運動プラスを参考に、私も手を挙げてドライバーに合図を出して調査してみた。結果は何もせずに横断した時より効果的だつた。

私はこの結果を持つて警察署に行つた。

ドキドキしながら警察官に話しかけてみた。すると、

警察官は私に優しく色々なことを教えてくれた。警察は交通ルールを市民に守つてもらうために様々な取り組みをしているそうだ。一つ目は交通の取り締まり、二つ目は交通安全教育、三つ目は広報啓発活動。交通の取り締まりとして教えてもらつて印象的だったのが、違反したドライバーに切符を切り、ペナルティとして罰金を科すということだ。

「なるほど。だからドライバーは警察の目を気にしていたのか。」

今度は、警察の取り締まりに同行させてもらった。警察官が立つていると、「あら、不思議。」ほとんどの車

が歩行者を優先するし、歩行者がいなくても速度を落とす。これにはびっくりした。予想通りドライバーは切符を切られたくないから警察官がいると交通ルールを守るのだ。今回の調査で歩行者に対しても感謝の気持ちでお辞儀をする人がいたことが良かった点だ。悪かったのは横断歩道を渡らない人やスマホを見ながら歩く人がいたことだ。

警察官がいなくとも交通ルールを守つてほしい。

自分の身を守るために交通マナーを考えてほしい。「ドライバーも歩行者もそれぞれが交通ルールやマナーを守り、お互いにゆずり合つて事故のない安全なまちにしましょう！」私はこの自由研究でこのメッセージを伝えたい。

「歩行者優先！」

今日も私はこう言つて横断歩道を渡り出す。

山口県周南市立福川小学校

五年 宮崎 祐奈

右よし、左よし、心の準備よし

「今日も安全に登校するよ。右よし、左よし、心の準備よし。」

家を出発する時、この言葉をしつかりとむねにきざむ。気持ちにゆとりを持つ心構えは大切なことで、心の準備をして、登校するようにしている。通学路は交通量が多い道路やふみ切りがある。朝は通勤ラッシュで、横断歩道をわたるのがとてもこわいけれど、保護者や見守りたいの方々の立しようのおかげで、私達は安全に登校することができる。朝早くから立しようをしてくださることに、私達は、心から感謝している。無事に登校して、授業を終えて帰宅するとほっとする。

最近、高齢者の運転に関する事をよく耳にする。私の父は、自動車学校に勤務していて、安全について家族でよく話し合う。青信号は、「進む」ではなく、「周りの安全を確認して進むことができる」など、安全の大切さについて話している。運転手側から見ると、子供は見えにくい時があるので、手をまっすぐ挙げるなど、自分の存在をしつかりと示すことも重要だ。視野に関しては、子供のほうが大人よりもせまいので、危険に気付くにくい。危険がひそんでいないか、しつかりと確認することが大切だと思った。

私は自転車に乗って、母とよく買い物に出かける。四年生の時、「自転車運転免許証」をいただき、とてもうれしかったと同時に、交通安全に対する意識もさらに深まり、身が引きしまる思いがした。自転車に乗る時はヘルメットを必ず着用し、ゆっくり運転するよう心がけている。せまい道路から自動車が近づいてきた時、ヒヤリとしたことがあるので、目視をして安全を確認してから運転したい。

私の父は、自動車学校に勤務していて、安全について家族でよく話し合う。青信号は、「進む」ではなく、「周りの安全を確認して進むことができる」など、安全の大切さについて話している。運転手側から見ると、子供

いることを聞いてみると、

「交差点を右左折する時やスーパーのちゅう車場などでは、歩行者に気を付けて運転をしているよ。」

と話してくれた。私は祖父に

「最近はハイブリッドカーが多く、エンジン音が静かで自動車に気付きにくい時もあるから、歩行も気を付けてね。」

と言った。

年れいによつて、能力にちがいはあるけれど、交通安全に対する意識はどの世代も共通だと思う。命は、たつた一つ。これからも交通ルールを守り、気持ちにゆとりを持って、自転車の運転や歩行など、安全に行動できるよう心がけたい。

自分たちの事故から学んだこと

徳島県藍住町立藍住北小学校

六年 曽我部 大和

テレビでは毎日のように事故のニュースがある。事故で亡くなつた人の事を考えると、とても悲しいが、わざとではなく事故を起こしてしまつた人の事を考えても心がいたむ。

自分が三年生のころ、自転車で前を行く友達を追いかけていて、曲がり角で一時停止している車にぶつかった。相手の車には、きずがついていて、自分の体と自転車は無事だつた。そのあと警察官が来て、車のドライブレコーダーを見ると、自分が左右確認せず角を曲がるのが映つていた。「やつてしまつた。」と思つた。

相手の車の運転手の人は、自分を責めず許してくれた。お父さんとお母さんにはとても怒られた。本当だつたら自分が加害者で、車の修理費を出さなくてはいけないことや、相手にケガをさせていたら、高額ないしや料を払つたりどんでもない事になつていたと言われた。

また、次の年のある日、学校が終わって家で姉の帰りを待っていると、姉の友達が家に来て「(姉が)救急車

で運ばれた。」と教えに来た。その時とてもびっくりしたし、とても心配だった。姉は一時間くらいで帰つてきた。手のひらにいたそうなきずがあつた。

話を聞くと、学校帰り走つて丁字路に出て、車にぶつかったそうだ。車の運転手は、そのまま立ち去ろうとしていたが、近くにいた男の人が運転手を引き止めてくれ、救急車を呼んでくれたそうだ。大したケガがなくて本当によかつたと思つたし、その男の人にとって感謝した。自分も姉も左右を確認せず、自分は加害者で、姉は被害者になつた。交通ルールを守らないと、簡単に加害者にも被害者にもなるし、家族やまわりの人にもたくさん迷惑をかけるということを身をもつてわかつた。

今回の自分たちの事故が、ニュースになるような大きな事故にならなくて本当によかつたと思う。これからも、事故の加害者にも、被害者にもならないように、しっかりと左右確認し、交通ルールを守るようにしたい。また、交通事故を目撃したら、姉を助けてくれた男の人のような行動をしたいと思う。

愛知県豊橋市立福岡小学校

六年 中嶋 結衣
なかじま ゆい

いつしゅんの出来事

「ドッカーン」

私は何が起こつたのかわからなかつた。

知らないおばさんに

「みんな早く出て」

と言われ、言われるがままに外に出た。その時、初めて現実を知ることになった。

私のおばあちゃんの車が道路の横向きに止まり、車体がグチャグチャになつていて、おばあちゃんは「ごめんごめん」と言つていたが胸が痛いと救急車に乗つてしまつた。となりで妹も泣き出した。私だって初めてのこととでどうしていいのかわからず泣きそう。こわい夢でも見ているのか、現実なのかわからなかつた。まるで遊園地の絶きようマシーンに乗つた後のような感じだつた。おばあちゃんはろつ骨骨折、妹は足指三本の骨折、私は

首のあつぱく骨折といった大ケガをしてしまった。現場

で警察官に後部座席でもシートベルトをしなければいけ

ないよと言われて気付いた。私は高速道路以外は後部に

乗った時シートベルトをしたことがなかった。というか

しなくてもいい反ではないからと自信を持つていた。しか

し今回の事故でシートベルトをしていればこんな大ケガ

をすることなかつたと思った。今さら後かいしてもあと

の祭りとわかつていてが後かいしかない。今思えば、ぶ

つかつた時に妹はイスの下へ、私は右から左に飛ばされ

た。シートベルトの大切さを知つた。自分の命は自分で

守らなければいけないと強く思つた。交通規則を守らな

ければ死亡することだつてある。このぐらい平気なんて

考えていた私ははずかしくなつた。

二度と事故にあいたくないし、ケガもしたくない。どの

イスに座ろうとシートベルトは必ずすると心にちかつた。

交通ルールは守ろうと声を大にして言つていこうと思う。

岐阜県各務原市立蘇原第一小学校

六年 西瀬 千紘

横断歩道でコミュニケーション

信号機のない横断歩道でなかなか止まってくれない車

に、私は少し腹立たしく待つていた。すると、何台かの

車が通り過ぎた後、やつと一台の車が止まり横断歩道を

渡ることができた。でも、私のちょっとした心がけで、

何か変わるものかもしれない。

私が小さいころ、父や母から、

「道を渡る時は、右を見て、左を見て、手を上げて渡るんだよ。」

とよく言われた。それは、低学年で背の小さな私が車の

運転手さんに気づいてもらえるように、手を上げた方が

いいのかと私は思つていた。けれど、自分の身長も伸び、

学年が上がつてだんだんはずかしくなり、最近では手を

上げて道を渡ることが少なくなつてきた。

それに、いつも家族で車で出掛ける時、横断歩道が近づくと、

「歩行者がいるよ。」

と遠くに見える歩行者に気づいた母が父に知らせていく。それはなぜかと聞いたら、横断歩道付近に歩行者がいる場合は、必ず車は一時停止をしなければならない交通ルールなのだと教えてくれた。だから、歩行者の私が待つていたら、車が気づいて止まってくれるだろうと思つていた。

そこで私は、横断歩道の渡り方について調べてみた。すると、長野県は横断歩道の一時停止率が一位だということが分かった。長野県では、歩行者が横断歩道を渡り終えた後に「ありがとう」の気持ちをこめて、お辞ぎをする習慣があることを知つた。それで、運転する人も「次も止まろう」という思いやりの気持ちに繋がり、横断歩道の一時停止率の結果に出ているのではないかと言われている。

また、手を上げて渡ることは、小さな子供が目立つためだけではなく「横断歩道を渡りたいです」と明確な意思表示のために、子供だけでなく大人も手を上げて、ハンドサインを出すことが大事だということを知つた。

横断歩道で車が止まつてくれなかつたのは、私にも原因があつたのだ。それは、交通ルールだから車が止まつてくれるのは当たり前ではなく、歩行者の私もちやんと意思表示をする必要があるということだ。そして、歩行者も運転する人も互いに目と目でコミュニケーションをとることで、より安全に渡ることができるのだ。それから、渡り終えた後に感謝の気持ちを伝えることで、次の「どうぞ」の思いやりに繋がつていくのだと思う。

交通安全は、人と人とのコミュニケーションによって、悲しい事故を減らすことができるのではないだろうか。交通ルールやマナーを正しく理解し、コミュニケーションをとろうとする私の心がけで、事故を防ぐことができるので。だから、これから横断歩道では、手を上げて、目と目でコミュニケーションをとり「止まつてくれてありがとう」と感謝の気持ちを忘れずに伝えたい。

審査を終えて

NPO 法人日本こどもの安全教育総合研究所理事長 宮田 美恵子

小学生の部

令和六（二〇二四）年十一月に改正道路交通法が施行され、自転車運転中にスマートフォンなどを使用する「ながら運転」への罰則が強化されました。また、前年には「すべての自転車利用者に対する乗車用ヘルメット着用の努力義務」も施行されています。

これらは、発達途上にある子どもたちが自らを守ることにつながる重要な改正です。

この交通安全ファミリー作文コンクールの意義は、子ども自身が交通空間での出来事を振り返り、あらためて考えてみることにあります。さらに書くことを通して、考えが行動化されることを期待しています。

開始以来四十六年となる今年、小学生の部は全国から千二百五十三点の応募があり、予備審査と本審査によつて次の各賞を決定いたしました。

最優秀作（内閣総理大臣賞） 小学生の部から一点

優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞） 小学生の部各学年から一点以内

優秀作（文部科学大臣賞） 小学生の部から一点以内

佳作（警察庁交通局長賞） 小学生の部各学年から三点以内

表彰作品および講評は次のとおりです。

最優秀作（内閣総理大臣賞）は、千葉県の三年生 永野太鳳さんの「つながれわたしのありがとう」が受賞し

ました。横断時に止まつてくれた運転手にお礼をしなくなつてしまつた筆者は、お母さんとの会話でお礼には力があり、つながつていくと氣づきました。心の変化がいきいきと述べられている点が高く評価されました。次に、優秀作（文部科学大臣賞）は、熊本県の二年生酒井宗佑さんの「ぼくのおうだんほどうのわたり方」が受賞しました。いつか白杖を持つて一人で歩いてみたいという前向きな意欲を持つてゐる筆者に、読む側も勇気づけられる作品です。

優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）の一つ目が、千葉県一年生松隈唯さんの「うんてんちゅうのスマホ」です。お母さんが事故に遭つたことを振り返り、スマホ運転の危険性と防止を強く訴えています。交通安全に対する切実な願いが伝わる作品として評価されました。

同じく優秀作を受賞したのが、福井県二年生横山凌央さんの「気もちのちがいがじこのもと」です。お母さんから、危険な運転をする自転車の中学生に遭遇したことを聞きました。体験談を聞いて事故原因を深く考えている点が印象的な作品です。

続いては、香川県三年生松本栞奈さんの「安心してくらせるまちへ」です。小学一年生の時に事故に遭つてしまい、今も心と体の傷が癒えない筆者。自分のように事故に遭う人が一人でも減るように、という強い思いが伝わつてくる作品です。

長崎県四年生大木梨音さんの「わが家のルール」も優秀作を受賞しました。筆者は家族と話し合つて決めた四つの約束を実行しています。筆者の交通安全に対しても誠実に向き合つてゐる様子が見て取れる点が高く評価されました。

続いては、愛媛県五年生藤渕悠玄さんの「命の重み」です。筆者家族は、家族旅行の帰路、対向車線の車と自転車による事故を目撃しました。衝撃的な体験を経て、交通事故がなくなることを強く訴える印象的な作品として評価されました。

最後が、福井県六年生 小藤柊磨さんの「命を守るヘルメット」です。子どもの頃に交通事故に遭つてしまつたおじさんがいる筆者は、自転車乗車時にはヘルメットを着用しています。交通安全の大切さを伝える優れた作品として評価されました。

佳作（警察庁交通局長賞）

佳作の一つ目は、鹿児島県一年生 有村綜真さんの「おうだんほどう」です。筆者は登下校に慣れてきたころにヒヤツとする体験をします。登下校に慣れてきた今こそ気を付けたいと、安全意識の高まりが描かれている作品として評価されました。

大分県一年生 竹山明里さんの「てをあげておうだんほどうをわたります」も佳作を受賞しました。筆者は交通事故で亡くなつた会つたことのない兄について心の内を正直に表現しています。安全運転への強い願いが伝わる作品として評価されました。

茨城県一年生 谷古宇楓さんの「てをつなごう」も佳作を受賞しました。道だけでなく、駐車場でも車の動きに注意しないと危ないと知つた筆者。弟を守るお兄ちゃんの頼もしさが伝わつてくる作品として評価されました。

兵庫県二年生 鷹取遵さんの「ぜつたいにわたれないおうだん歩道」も佳作を受賞しました。筆者はある日、使わない約束の横断歩道を使つてしまします。家族を悲しませないために約束を守るべきだったという気づきが鮮明に伝わつてくる作品です。

福井県二年生 瀧口理紗子さんの「『とび出しちゅうい』氣をつけて」も佳作を受賞しました。筆者のおじいちゃんの家の前には、走つて いる男の子の看板があります。さまざまな看板に注意を向け、安全意識を高めていく様子が評価されました。

徳島県三年生 倉田はるさんの「自分で自転車で出かけたい」も佳作を受賞しました。子どもだけで自転車で出か

けるために気を付けることを家族と一緒に実践的に学び、常に安全に気を配ることを心に決める様子がよく伝わつてくる作品です。

茨城県三年生 柴颯翔さんの「『死角』があると知った日」も佳作を受賞しました。お母さんに言われて車の運転席に座った筆者は、「死角」がどんなものかを知りました。実体験を通して確認の大切さに気づいた点が印象的な作品としても評価されました。

大阪府四年生 岩丸琴葉さんの「あなたは被っていますか?」も佳作を受賞しました。ある日、自転車で思わずがをしたことをきっかけに、ヘルメット着用の大切さを実感した筆者。意識が大きく変わつていく様子が描かれた作品として評価されました。

兵庫県四年生 立花樹さんの「街の工夫とぼくができること」も佳作を受賞しました。色覚に少し異常がある筆者は、街の中の交通安全のための工夫に気づきました。安全のための工夫と使う人の関係が描かれている点が素晴らしいと評価を得た作品です。

茨城県四年生 古谷優月さんの「わたしのお姉ちゃんははん長さん」も佳作を受賞しました。筆者は登校班の班長であるお姉ちゃんを尊敬しています。お姉ちゃんのように交通安全のために積極的に行動しようとする姿が描かれている点が評価されました。

福島県五年生 阿部楓さんの「事故で失うもの」も佳作を受賞しました。おじいちゃんが事故に遭つたことをきっかけに、相手の気持ちを思いやらなければ事故は防げないと筆者は述べています。ルールを守ることの大切さを訴える点が評価されました。

兵庫県五年生 川内咲弥さんの「歩行者優先!」も佳作を受賞しました。筆者は「歩行者優先」について自由研究を行いました。安全なまちにしたいという筆者の行動力と願いが伝わつてくる作品として評価されました。山口県五年生 宮崎祐奈さんの「右よし、左よし、心の準備よし」も佳作を受賞しました。筆者は交通ルール

を守ると同時に気持ちにゆとりを持ち、安全に気をつけることの大切さを述べています。知識を培っていく様子も伝わる作品として評価されました。

徳島県六年生 曽我部大和さんの「自分たちの事故から学んだこと」も佳作を受賞しました。自分と姉が事故に遭遇した経験から、交通ルールを守る意欲を述べています。加害者・被害者の両側から交通安全に対する理解を深めた作品として評価されました。

愛知県六年生 中嶋結衣さんの「いっしゅんの出来事」も佳作を受賞しました。おばあちゃんの車に乗っている最中に予期せぬ交通事故に遭った筆者。心の動きがリアルに描写されており、交通ルールを守るという決意が強く表れている作品です。

岐阜県六年生 西瀬千紘さんの「横断歩道でコミュニケーション」も佳作を受賞しました。道を渡る際に手を上げるのは、意思を明確に示すためだと知った筆者。ルールを守り思いやることで、安全に道路を横断できることが描かれている点が評価されました。

今回ご紹介した受賞作からは、実体験や身近な人のエピソードを基に、子どもたちなりに交通安全に対しても真剣に考えてもらっていることがわかり、心強く感じます。

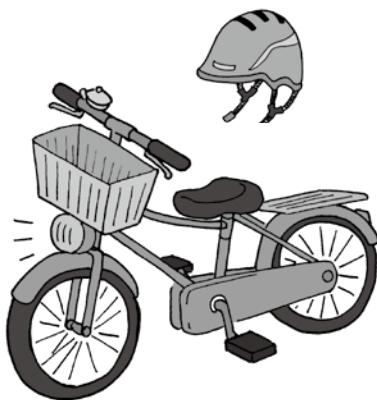
最後になりましたが、多数の応募作品を読んでいただいた予備審査員の方々、事務局の方々、関係者の方々、また、本審査会において、真正で厳正な審査を行つてくださいました審査員の方々には大変お世話になりました。心よりお礼を申し上げます。

令和6年度交通安全ファミリー作文コンクール審査員 － 小学生の部 －

(敬称略、順不同)

宮田 美恵子	NPO 法人日本子どもの安全教育総合研究所理事長
羽 藤 雄 次	足立区子どもの安全安心プロジェクトチームリーダー
井口 美由紀	全国公立小・中学校女性校長会会長
入 谷 誠	一般財団法人全日本交通安全協会専務理事
幸 田 徳 之	一般財団法人日本交通安全教育普及協会専務理事
児 玉 克 敏	内閣府政策統括官（共生・共助担当）付参事官（交通安全対策担当）
中 園 和 貴	文部科学省総合教育政策局
	男女共同参画共生社会学習・安全課長
今 井 宗 雄	警察庁交通局交通企画課長

中学生の部



最優秀作 内閣総理大臣賞

広島県福山市立城北中学校

三年 新田 晃

命を守るヘルメット

僕は、中学校に入学し、自転車で通学しています。学校推薦の白いヘルメットを購入しました。ある朝登校時、ヘルメットをかぶりあごの下でカチッと音がするのを見ていた母が、「おじいちゃんを思い出すわー。」と言います。四年前に亡くなつた祖父の事です。祖父は、家から近くの鉄工所に勤めていて、そこまではバイク（昔のスーパーカブ）で通勤していたらしいです。深緑のヘルメットにあごヒモの所をいつもきつちりしめて行つていたが、とても印象的だつたらしいです。近所の方々にも、安全運転は有名で、挨拶をよくしてくれる元気な人だつたらしいです。一生いというのは、僕が生まれる九年も前に交通事故にあり、

車椅子生活になつたからです。だから、僕は祖父の元気な安全運転のバイクの姿を見た事がありません。それをとても残念に思います、母と祖母は、「生きててくれただけでも良かった。ヘルメットのおかげなんよ。」と教えてくれました。事故については、いつものように祖父がバイクで通勤していて、交差点の青信号を直進していたら、暴走し右折して来た対向車に、はねられた形になつたそうです。祖父は、バイクごと横転し、道路に投げ出され、縁石で頭を強打し、縁石にべつとり赤い血がついていてひどい事故だと分かつたと祖母が言つていました。けれど、ヘルメットをきちんととかぶっていた祖父は、頭は強打したけれど、ヘルメットに守られて、骨折は頭も身体もしていても、幸い記憶力や言語力は守られていたそうです。だから、事故から、二十年、身体に障害は残つたけれど、生きててくれたので、僕達とも会う事が出来ました。事故当初は、母と祖母は相手への恨みや憎しみに苦しんだそうですが、（消える事はありませんが）その気持ちを祖父が回復するよう応援する事だけに注ぐように切り換え痛みに耐え、リハビリを頑張る前向きな祖父の事だけ考えたそうです。一生寝つきりと言われていた所から、車椅子で生活出来るまで

回復し、母も祖母も、祖父が生きてくれている事が本当に支えになつたようです。

その反面、祖父が昔のように元気だつたら、一緒に歩いたり、走つたり、買い物に出かけたり…。ほんの普通の日常が過ぎさせていたのに…。ただ普通の日常を送りたかった…と祖母が残念そうによく言つっていました。

事故は、幸せな日常を壊します。ほんの少しのルールを守らない人がいたら、相手の人生もその家族の人生もまわりも変えてしまうかもしれません。その大変さを僕は、身近な人の辛い思いや経験で知っています。僕はまだ車の運転は出来ないけれど、将来車の免許を取つたら、正しく交通ルールを守つて運転すると決めています。今は、毎朝あごの下で、カチッと音がするよう、きちんとヘルメットをかぶり交通ルールを守つて自転車を運転する事を続けていこうと思っています。



優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

香川県高松市立山田中学校

一年 片山 ほのか

大切な家族の命を守るために

中学校に入学して、毎日自転車に乗るようになり、まだ事故に遭ったことはないが、雨の日に滑つて転倒するなど何度か危ない思いをしたことがある。

そこで、今後事故に遭わないようにするために、また、私以外の家族が自転車や自動車で事故に遭わなかったために、交通安全について家族と話し合うことにした。

私の父は警察官なので、これまでに仕事で遭遇した事故について聞いてみた。父によると、交番勤務の時に様々な事故処理を取り扱ったとのことで、共通していえることは、事故には必ず原因があり、どちらかが交通違反をしたか、マナーを守っていないことが多いと教えてくれた。私も自転車通学に慣れてきたことで、「これくらいいいかな」とルールを守らないといけないという気持ちが緩んでいることに気がついた。この気持ちの緩みが事故へと繋がるのだ。

もう一つ父が教えてくれたのは、単独事故以外は相手がいる交通事故で、その場合、自分の家族だけでなく、相手の家族も同じように辛い思いをするということだ。交通事故は殺人事件のよう自分意思で犯すものではなく、ふとした気の緩みから起きてしまう。わざとではないにしても事故の原因を作った方も、それが原因で事故に遭遇してしまった方も様々な悲しみや苦しみを抱えることになるだろう。私たち家族もどちら側にもならないために何が大切なのか話し合つた。

まず、車や自転車に関係なく、出かける時は時間に余裕を持ってゆつたりとした気持ちで運転することが大切である。全国的にみても、香川県は交通マナーが悪いことで有名で、毎年、交通事故死者数が多い。気持ちに余裕があり、譲り合いの心が持てれば、確実に事故は減るのではないかと思う。私はよく、時間ギリギリで家を出ることがあるので、これからは、五分前行動を意識して

いきたい。

次に大切なことは、自転車でも、事故を起こせば死亡事故につながることがあると認識し、自覚を持つて自転車に乗ることである。まずは、ヘルメットを被ること、携帯電話を使つたりイヤフォンをしたりするなど、ながら運転をしないことを守つて自分の身を守り、さらに、スピードを出しすぎないこと、飛び出さないこと、譲り合うことを守つて他人に怪我をさせないように気をつけなければいけない。

家族と話し合つて気づいたことは、両親は私や兄のことをいつも心配して見守つてくれていたということだ。母は毎日、「気をつけてといってらっしゃい。」と見送つてくれていたが、それは、元気に帰つてきてほしいと願つているからだそうだ。そんな両親を悲しませないためにも、交通事故を起こさないために大切なことをしつかり守つて、安全運転で自転車に乗りたいと思う。

當時中学一年生の私は、小学校で六年間歩いてきた通学路を横目に自転車で通える喜びを感じていました。自転車通学にも少しづつ慣れてきた六月、朝の八時ごろ、いつものように自転車をこいで、学校にむかっていました。その道は、小学生と中学生がすれ違う通りです。私は前をいく友達を追いかけながらこいでいました。友達のスピードは速くどんどん小さくなつていきます。私は諦めて、向かってくる小学生の列を気にしながらこいでいました。小学生に当たらないよう、慎重に進んでいきます。横断歩道で止まり赤から青になり、小学生の列が渡りきるまで待ちよいよ進もうとしたその時です。

ペダルを一、二、三と踏んだ瞬間、右側から小学生が笑顔で勢いよく走ってきました。気づいた時には、私の体は

鳥取県米子市立淀江中学校

油断したその先は

あれは、私の初体験でした。今でも思い出すと、心がドキドキします。

私は前をいく友達を追いかけながらこいでいました。友達のスピードは速くどんどん小さくなつていきます。私は諦めて、向かってくる小学生の列を気にしながらこいでいました。小学生に当たらないよう、慎重に進んでいきます。横断歩道で止まり赤から青になり、小学生の列が渡りきるまで待ちよいよ進もうとしたその時です。

二年 長谷川 俊
はせがわ しゅん

ななめになり、自転車が倒れないよう、支えるのに精一杯でした。私は何が起こったのか分かりませんでした。しかし、泣き声とともに、自転車のカゴがへこんでいることに気づき、その瞬間やつてしまつた、と思いました。

と同時に、私は何をしたら良いのかわからず泣いている小学生のそばで声をかけることに必死でした。ランドセルで小学校一年生であることに気づきました。私と同じで学校に慣れ始めた楽しい時期だとわかり、楽しい通学路を私が恐怖体験にさせてしまつたと感じました。学校のチャイムが鳴り周りにいた小学生から、「大丈夫です、さきに行つてください。」

と、言われその優しさに甘えましたがその反面ひき逃げ犯と同じではないか不安でした。

学校の先生に報告し、先生から言われた、「大丈夫か」の言葉に救われました。その日の内に小学生の保護者にも謝罪をし家族とも乗り方について話をしました。その時に自転車は、車と同じく車両なので特に気をつけないといけないということを学びました。
しかし私にとつて辛い一週間が始まりました。あの事故からは、いつも以上にスピードをおとし、小学生の列

とすれ違う時には歩いた方が速いくらいの速度で進めていくようにしました。しかし、知らない小学生たちが私に指を差して、

「あの人つてあれだよね。」

などどうわざが広がつてしまつたのです。それが何日も続きました。登校している時に小学生とすれ違うと視線を感じ、日に日に指を差す人の数が増えていきました。本当に私だけが悪かつたのだろうかとつらく、苦しかつたです。でも、学校の先生たちに相談をし、対応をしてもらつたおかげで以前のように通学ができるようになりました。

学校で交通指導があり警察の方より、改めて、歩行者からみたら自転車は車と同じであり、問題が起きてからでは遅いと指導がありました。私は、あの時を振り返ると相手が小さい一年生だった為、目線にはいつていなかつたことを、思い出しました。もしスピードが出ていたらと思うとゾッつとします。左右の確認の大切さ、歩行者優先、慣れた環境だからこそその油断に気をつけて、時間と心に余裕をもつて行動をするように心がけています。

三年 岩佐 葵

誰もが交通社会の一員

ぶつかる！咄嗟に両手でブレーキを思い切り握った。少し後輪が滑つたが、無事に止まることができた。しかし、自動車との距離はわずか三十cmほどしかなく、前かごに入っていたお弁当袋ははずみで飛び出してしまった。脇の下を汗がつたつしていく感覺がした。これが冷や汗をかくということ。

学校までの通学路。自転車に乗ることがそれほど得意でもない私は、ゆっくりとペダルをこいでいた。自転車通学の高校生にどんどん抜かされる。しかし、焦つてスピードを出しても危ないと、自転車にしてはスローな走行だつた。途中の信号の無い交差点で一台の車が合流しようとしていた。私が走行していた車線が優先道路だつたため、迷いなくペダルをこぎ続けた。だが、車の前を通り過ぎようとした瞬間、車が前進してきた。慌てた私は、急ブレーキをかけた。これが冒頭のシーンである。

自動車も急ブレーキをかけたのだろう。自動車を運転していた人は大慌てで車から降り、私のお弁当袋を拾いながら駆け寄つてくれた。怪我はないか、自転車は壊れていなか、などを聞いてくれた後、怖い思いをさせて申し訳なかつたと謝つてくれた。そして、私の横を走行していた自動車が自分に譲つてくれたため迷惑にならないように急いで合流しようとしたこと、自転車も止まるだろうと思い込んだことが今回の原因だつたと何度も頭を下げていた。

帰宅後、このことを家族に話した。私は自分に全くがないと思つていたため擁護の言葉を待つていたが、両親と姉からはそれぞれ異なつた視点から注意を受けた。自動車を毎日のように運転する両親からは「自動車の運転手の思い込みや注意不足が原因ではあるが、自転車側も自動車が出てくるかもしれない」と考えて止まることができるようにしておかなければいけない」と指摘を受けた。私と同じ自転車通学だつた姉からは「自転車のスピードが遅いから止まると勘違いされたのかもしれない。それに、もし飛び出してきたのが自動車じゃなくて歩行者だったら、加害者になつてていたかもしれないよ」と注意

された。交通ルールを守っているつもりだったが、危険予測を怠り、交通事故にあうかもしかなかつたことに気がついた。

交通ルールを守っていても交通事故を起こしてしまふ、巻き込まれてしまう可能性がある。加害者だけではなく被害者にもならないようにするためにはどうすればよいのか。このことについても家族で話し合つた。出した結論が「自動車、自転車、歩行者などの立場に自分を置いて交通ルールを厳守し、常に注意を怠らないこと」だつた。あの時、私は自分のことしか考えていなかつたのではないだろうか。優先道路という交通ルールだけを妄信し、自動車が自分をどう認識しているのか想像していかつたのではないか。歩行者が飛び出していくかもしきないという注意が足りなかつたのではないか。改めて自分が視野の狭さを痛感し、反省した。これからは、交通社会の一員であることを自覚し、交通ルールを守るだけでなくさまざまな立場から危険予測をすることを常に心がけていきたい。この意識が広がり交通事故が減つていくことを願い、今日も自転車で学校に行く。

優秀作 文部科学大臣賞

愛媛県松山市立南中学校

二年 片桐 麻帆かたぎり まほ

思いやりの注意

私は、習い事等で、よく母の運転する車で送迎してもらいます。ほぼ毎日のことなので、その道中、様々な場面に出くわしたり、交通ルールを明らかに無視している人も見かけます。

雨がザーザー降っている日に、傘を片手でさしながら、自転車を片手運転している人。車より自転車が優先とは言え、出会い頭に一回も停止せず躊躇なく飛び出してくる自転車。そしてよく見かけるのが、イヤフォンを耳に付け、スマートフォンに夢中になりながら歩いていて、全く周りの状況が把握できておらず、車が近づいていることにも気付かず、車が追い越す時によく気づいている

驚いている人。

もし運が悪かつたら、事故になりかねない状況でした。けれど、事故にはなっていません。それはなぜかというと、片方が未然に防ぐ行動をとれているからです。

だいたい事故が起る原因是、双方の不注意が重なつてしまつた時だと思います。

母は、運転中、危険な場面に直面すると、いつも私に言つてゐることがあります。

「相手側の注意もこちらがしてあげる気持ちでいてね。」

「相手の不注意もこちらがカバーするように。」

そうやって危険な状況でも注意不足を補つていけば、何も起こらず済むのだと教えてもらいました。

私は、交通安全とは、自分自身がルールをきちんと守り、

それを行動で表すことで安全が確保できると思つていてましたが、それだけでは、安全は守られないと気付きました。

特に、まだ幼い子供や、高齢者の多くは、ルールを理解していかなかったり、注意力が低下している可能性が高いので、こちら側が配慮し、周りがサポートしなければならないと思います。

最近、自転車の交通違反に反則金を納付させる、いわ

ゆる「青切符」による取締りの導入を盛り込んだ改正道路交通法が二〇二四年五月十七日、可決・成立了。信号無視や携帯電話を使用しながらの運転などが対象となり、二年以内に施行されるそうです。

私は今まで、あまり自転車を乗らず過ごしてきたのですが、高校生になると、自転車通学が始まります。新たに改正されたルールどころか、今まででにあつた自転車の交通ルールも知らないことがたくさんありました。

自転車通学が始まれば、朝はバタバタしてしまったり、睡眠不足の日だつたり、その日その日のコンディションも違うので、毎日のように自転車を利用するようになる私達は、より安全に意識を高めていかなければならないと思います。

もちろん、それぞれ一人一人が交通安全の意識を持つて行動することが一番大事ですが、少し心に余裕を持つて、ゆずり合つたり相手を思いやる行動も、町全体の交通安全につながると思います。

独りよがりの交通安全ではなく、皆がその日道で出逢つた相手のことを思いやれる、そんな社会になればいいなと思います。

佳作

警察庁交通局長賞

兵庫県神戸市立白川台中学校

一年 庄司 基

もしあの時ヘルメットがなかつたら……：

僕の高校生の兄は、毎朝最寄り駅まで自転車で通学しています。兄は朝にせつかくセツトした髪型が崩れるにもかかわらず、しっかりとヘルメットを着用して自転車に乗つていきます。僕の家の周りは坂道が多く、急な坂道もあるので、自転車のスピードが出やすいため、とても慎重な兄は安全運転を心がけ、周囲をよく見て自転車に乗つているそうです。

今回は他に通行人や車も通つていなかつたので兄一人のケガだけで済みましたが、もし歩行者を巻き込んでしまつてしたり、後ろから来た車にはねられたりして、もつと大きな事故につながつてていたかも知れないと僕はぞつとしました。

ある朝、いつものように兄が自転車に乗つて通学していると突然、前輪が回らなくなり前輪を軸にして後輪が浮き上がり、乗つている自転車ごと前転してしまいました。リュックに入りきらなかつた荷物をエコバッグに入れ

てハンドルにかけていたので、そのエコバッグが前輪に巻き込まれたことが原因でした。兄はハンドルを握つたまま前転し頭から地面に落ちてしましました。

兄がかぶつていたヘルメットは傷だらけになり、また顔面を打つていたため鼻血が止まらず、顔や手の甲も傷だらけ、リュックに入れていたパソコンもへし曲がり、自転車も壊れてしまいました。

連絡を受けた母がすぐに駆けつけ病院に連れてていき、先生に体中のレントゲンを撮つてもらつたそうです。幸い骨折はなく打撲と首の捻挫や擦り傷だけで済みました。それでも痛みが酷く、痛みがひくまで一ヶ月くらいかかるとさうです。

兄は自転車に乗つて通学するとき、事故をした場所を通ると、今でもあの事故のことを思い出して怖くなるそ

うです。母も家族が家を出たあとに電話が鳴るとドキッとするようになつたと言つていました。

もし兄がヘルメットを着用していなかつたら……と思うと僕も本当に怖くなります。兄は頭を強打して死んでしまつたかもしれません。物は壊れてもまたお金を貯めて買うことができるけれど、命はそうはいかないと命の大切さを改めて感じました。

僕も高校生になつたら自転車通学するかもしれないので、ハンドルに物をかけない、また自転車に乗るときはマフラーやコートなどタイヤに巻き込まれないような服装を考えて乗ることも大事だと思いました。

さらに、自転車に乗るということは加害者にもなるかもしれないということをしつかりと頭に入れて乗らなければなりません。

今回の兄の事故を教訓に僕も交通ルールをしつかりと守り、事故を起こさないように気を付けて過ごそうと思います。

そして今の僕にできることがもう一つあります。それは、身近に起きたこの事故で感じたことや怖かったことを人に伝えることです。ただ怖かつただけで終わらせるのではな

く、ヘルメットの大切さ、家族も感じた恐怖、命の大しさをしつかりと友だちにも伝えていきたいです。

富山県富山市立水橋中学校

一年 廣野のひろの
琥太郎こたろう

思いやりをつくる交通安全

僕は、夏休みに「交通安全」について、家族で話しました。家族一人一人が気を付けていること、通学路の危険箇所について話し合ったことを紹介します。

まず、僕自身が気を付けていることは、交差点では、左右の安全を確かめてから横断していること、歩くときは右側通行をし、前方から車が来たら、一旦停止することです。

小学生の弟は、三年生になり、道路で自転車に乗るようになりました。弟が気を付けていることは、スピードを出さないようにすること、目と耳で安全を確かめることです。

父は、普段から車を運転する機会が多いので、道路を全体的に見て運転しています。高齢者や初心者が運転している車が前を走っていたら、いつも以上に車間距離に気を配っています。また、高齢者が自転車に乗っているのが見えたたら、突然転倒することがあるかもしれないのでは、より慎重に運転しています。さらに、雨の日は滑りやすいため、晴れている日よりも慎重に運転しています。

他にも、高速道路等を長時間運転するときは適度に休憩を入れながら運転するなど、天候や状況に応じて臨機応変に運転しています。車の運転をするということは、注意すべきことがたくさんあるということを知りました。

母は、小中学生の登下校の時間帯に車に乗るときは、突然子供が飛び出してくるかもしれないのに、より注意しています。また、僕たちが登校するときは、できる限り玄関先で顔を見て、笑顔で「いつてらっしゃい、気を付けてね」と声をかけるようにしています。心の状態が歩き方にも表れると思うので、安全に登校し、安全に帰つて来るよう気持ちを込めて言うそうです。

通学路については、危険箇所を確認し、実践していることを確認しました。用水路の近くは道幅が狭く、車が

通過すると落ちてしまう危険性があるため、周りに車がないか確認しながら通る必要があります。学校の近くの交差点は、車道と歩道を隔てるブロックがなく危ないため、なるべく車道から離れたところを歩くよう心がけています。幼稚園の前は、送迎で車の出入りが多く、急いでいる人もいるため、特に注意して、手を挙げて自分の存在を知つてもらうようにしています。

今回、通学路には危険なところがたくさんあることを改めて確認し、弟にも気を付けるように話をすることができました。また、母が笑顔で送り出してくれる理由を知つて、心が温かくなり、嬉しくなりました。僕もこれまで以上に笑顔で「行ってきます」を言いたいと思います。「交通安全」と「思いやり」はつながっているのだと思いました。

これからも通学路の危ない所を見つけたときは、家族や周りの人々に伝えて、事故にあわないように気を付けたいと思います。

群馬県前橋市立箱田中学校

一年 安原 思惟

姉の自転車通学と交通安全

私の家族は、群馬県の静かな町に住んでいます。家族は四人で、お父さん、お母さん、高校二年生の姉、そして私、中学一年生です。

毎日、姉は自転車で学校に通っていますが、私は歩いて学校に行っています。

最近、姉が学校から帰ってきて、「今日、車にぶつかりそうになつた。」と話してくれました。

姉が自転車で通学路を走っていた時、急に車が曲がってきて、危うく事故になりそうだったそうです。私はその話を聞いてとても驚き、そして怖くなりました。姉が無事で本当に良かったと安心したものの、もし事故が起こついたらどう考えると、とても不安になりました。

それから私は、姉が自転車通学することについて、もつと真剣に考えるようになりました。どうすれば姉が安全に通学できるのか、一緒に話し合おうと思いました。

まず、姉に夜道を走るときには反射材をつけることを提案しました。姉は「そんなに心配しなくてもいいよ。」と笑つていましたが、私はどうしても心配でした。夜道は暗くて、車から見えにくいので、少しでも安全にするためには、反射材が役立つと考えました。

次に、姉と一緒に通学路を見直しました。今まで姉が通っていた道は車が多く、狭い道でした。そこで、少し遠回りでも、車が少なくて広い道を選ぶことを提案しました。

新しい通学路を姉と一緒に自転車で走つてみると、前よりも時間は少しかかるけれど、車とすれ違うことが少なくて、安心感がありました。

お父さんとお母さんにも、姉が危険な目にあつたことを話しました。お父さんは車から見た夜間の自転車の見にくさを話してくれました。お母さんは自転車から見た車の危険度について話してくれました。

家族全員で話し合うことによって、交通安全を見直すこととも、とても重要なことなのだと感じました。

私はまだ中学一年生ですが、今後は私も自転車通学することになるかもしれません。その時は、今回姉と一緒に学んだことを忘れずに、自分の安全を守りたいと思います。

最後に、交通安全は、私たち全員が考えるべき大切なことだと思います。事故はいつでもどこでも起こる可能性がありますが、私たちが気をつけることで、それを防ぐことができるはずです。これからも家族と一緒に安全に過ごせるように、交通安全についてしっかりと考えていきたいです。

東京都共立女子中学校

二年 阿部 帆夏

とみもまた

「とみもまた」これが我家の交通ルールだ。

私は交通事故と聞くと歩行者が赤信号で横断して車にはねられるというイメージがあつた。しかし五年前そのイメージを大きく変えた出来事があつた。池袋暴走事故だ。青信号を渡っていた母親と子供が高齢ドライバーが運転する車にはねられた。ドライバーはアクセルとブレーキを踏み間違えたそうだ。私はこのニュースを見た

とき可哀想と強く思つた。二人を生き返らせてあげて欲しいと何度も願つたからならない。高齢者は車の運転をするべきではないとも思った。しかしそう思つても二人が亡くなつた事実は変わらない。日本から高齢ドライバーをゼロにすることはできない。ドライバーが変わらないのなら歩行者が変わるしかない。青信号でも車が突っ込んでくる今日。自分の身の安全を守るためにはどうのような対策が必要なのだろうか。家族で話し合い一つの結論に達した。それが「とみもまた」である。

「とみもまた」は「止まる、見る、もしかして、待つ、確かめる」の五つの行動を指す。「止まれ」の標識がある場所ではもちろんだが標識や信号がない場所でも一時停止する。青信号でも左右、前後が安全かどうかを見る。もしかして自動車、バイク、自転車などが来るかもしれないという意識を持つ。心や時間にゆとりを持ち安全が確認できるまで車が通過するのを待つ。安全に横断、通行ができるかどうかを一度だけではなく二度確かめる。中でも私が特に意識していることは「待つ」だ。時間に余裕がないと車が少し遠くに見えていても走つて渡つてしまふ。信号が点滅していても渡つてしまう。周囲を確

認せず信号だけ見て渡ってしまう。だから私は目的地に到着する時間から逆算して時間にゆとりを持つて外出することを心がけている。これを実行してからは信号が点滅していたら次の青信号で渡ろうと自然に思えるようになった。青信号でも周囲を確認してから渡れるようになった。

交通事故の大半はドライバー側に責任があると思う。だがドライバーに責任を押し付けても失われた命や能力は二度と戻つて来ない。自分は交通ルールを守っているから大丈夫。そう思っていてもルールを無視した車が突っ込んでくることがある。事実日本では毎日のように交通事故が起こっているのだから。自分の身を自分で守るにはどうすればよいのか。その答えの一つが「どみもまた」を実行することだと思う。自分が交通ルールを守るのは当たり前。それにプラスして周囲の状況を把握するのだ。

「どみもまた」が「おかしもち」のように日本中に広まつてほしい。そうすれば涙を流す人が少しでも減少すると思うから。

千葉県柏市立柏中学校

二年 小柏 奈帆子

安全へ繋ぐささやかな敬意

運転席の母が、すまなそな顔を見せる。

「そんなに気を遣つてくれなくとも……」

と苦笑しながら、こちらに深々とお辞儀をしている小学生達に向けて、ぺこっと軽く頭を下げる。気分よさそうに先へ向けて再び車を発進させる。それは私がかつて暮らした町で、何度も心に刻んだ光景だ。信号機のない横断歩道の前で、気付いた車が停まつてくれると、まづは一礼してから急ぎ足でそこを渡りきり、さらに振り返つて「ありがとうございます」と挨拶をする子も稀ではない。そんな律儀な子ども達だからこそ、見守る大人達も温かく、歩行者の姿を逃さず停車するドライバーが多く見受けられた。豪雪で知られる山形・米沢の、人情味あふれる土地柄の表れだつた。

所変わつて、今の街はどうか。私は四年前に、東北暮らししからまた元の住まいに戻つて來た。何でも揃つて便

利な、程良い都会と感じるこの生活は、時に雪国恋しさを抱きつつも、結構気に入っている。四季を通じて特に

不自由はなく続く日常はありがたい。しかし一つ、私ははどうしても受容しがたいこの街の常態がある。それは、我が物顔で車の前を渡つてゆく歩行者達の姿だ。特に私の住む地域は大きな団地やマンションが建ち並び、子供の数も多い。だから行き交う車も歩行者も、互いにルールやマナーの遵守がより求められるところだ。しかしながら、私が一歩行者として、或いは車の同乗者として日頃察するかぎり、運転者を顧みない横柄な歩行者の振る舞いが、恒常化してしまっているのだ。

確かに、横断歩道は歩行者優先だから、ドライバーには一時停止して先を譲る義務がある。一方の歩行者は、

その歩みを急がねばといふわれなどではなく、悠然と横断しても全く問題はない。ただ、より安全な交通を形づくる要として、やはり人の「心」があるのではないだろうか。J A F が行つた二〇二三年の調査結果によれば、「信号機のない横断歩道における車の一時停止率」において、千葉県は三一・九%で、下から数えて十一位。対して東北六県の平均は五十%を超えており、私はその数

値を知った時、まさに自身の経験と重ね合わせて、大いに納得してしまった。

ゆつたりした地方とは交通環境が異なる都会の人々に、一様に礼儀正しい歩行者像を求めるわけではない。けれども、忙しい往来の中にあっても、少しでも相手の背景を想像するゆとりが持てれば、独りよがりではなく、ちょっとした気遣いが見える行動に繋がっていくのではないか。停車した日の前を、無遠慮にちんたら横断されでは、思わず舌打ちも出てしまいそうだが、軽い会釈でもよい、歩行者からの心が伝われば、いささか晴れやかな気持ちでハンドルを握ることができるはずだ。だから私は、ほんの微力ではあるが、驕らぬ謙虚な歩行者であり続けたいと思う。

三年 新井 広子

一人ひとりから始まるもの

「一瞬のことだった。」と父は言つた。角から急に出てきた車、バイクのブレーキをかける父、気づいた時には反対車線の道路に倒れていた。私が生まれる前、父は仕事場へ向かう途中で事故に遭つた。角から出てきた車は父が走っていることに気づかず、そのままの速度で運転し、父が乗っていたバイクと衝突してしまつた。父は救急車で運ばれ、病院で治療してもらうと、右足の膝を骨折していることが分かつた。また、ガラスの破片で大怪我を負つてしまつた。この事故の話を聞いた時は驚きが大きかつたが、今、思うとこの事故で父が生きていられたのはヘルメットやジャケットの正しい装着ができるからだと思う。

父はいつもバイクや自転車に乗る時、ヘルメットを入念に確認している。頭のサイズに合つているか、あごひもカバーがちゃんとつけられているかなど母や私が自転車に乗る時も「もうちよつときつくしないと落ちてきちゃうよ。」と教えてくれる。しかし私は、小さい頃、ヘルメットを被ることに抵抗があつた。なぜなら、ヘルメットをピッタリに被ると汗をかい頭全体が蒸し暑くなるからだ。だから「ヘルメットを被ろう。」と言われても「被りたくない。」と言つていた。それでも「怪我をする」と危ないから被りなさい。」と言われ、その父の強い意志が命を守ることに繋がつたのだと思つた。父はバイクに乗る時ヘルメット以外にも冬は「ジャケットや厚めの服」を夏でも「長袖」を着ていた。衝撃を直で受けれるよりかは何かクッションのようなものがあつた方が自分への被害を小さくできるという考えも自分の命を守ることに繋がつたのだと思う。

実際に警視庁が令和五年に公開した「二輪車の交通事故統計」によると二輪車乗車中の交通事故死者は全国で約二割、都内では約三割を占めており、自転車や四輪車よりも高い数値となつていて。また、二〇一八から二〇二二年までの五年間で致命傷部位として割合が多かつたのが頭部で約半分、次いで胸腹部が約三割となつていた。二〇二二年に起きた二輪車乗車中の死亡事故に

おける約三割が頭からヘルメットが外れていた。これは、ヘルメットを正しく装着していなかつたことが頭部に致命傷を負つてしまい死亡事故に繋がつたと考えられる。

私たちと事故は身近な存在だ。だからこそ、ヘルメットやジャケットを正しく装着して安全性を高めていくことが大切だと思う。

あの日、もし父がしつかりヘルメットとジャケットを装着していなかつたら父も私も今はいなかつたかもしない。これからは父のように正しくヘルメットやジャケットを装着して、自分の命は自分で守れるようにしていきたい。また、正しい装着の仕方を沢山の人々に発信していくみたい。

一人ひとりから始まる交通安全の輪。一人ひとりの命も周りの人たちの命も守ることができるように。

山口県下関市立木屋川中学校

三年 中村 輔

なかもら たすく

決意の夏

祖父と叔父は交通事故で亡くなっている。祖父は昭和六十年の夏に、叔父は平成四年の夏に、それぞれ自動車運転による事故だった。

この八月、叔父の三十三回忌の法要があつた。私は父から事故の様子を聞いた。叔父が運転免許を取得して初めての夏、友人を乗せて帰路に着く途中、運転を誤つて道路から転落したらしい。同乗していた叔父の友人は、地元の方でよく知つている。毎年のように墓前に手を合わせにきてくれる。叔父も生きていてくれれば五十一歳になる。

自動車事故の原因は何か調べてみた。安全不確認、脇見運転、動静不注視、漫然運転、運転操作不適等、様々な原因があつた。私はまだ自動車の運転ができる年齢ではないが、通学、習い事の行き帰りで毎日のように自転車に乗る。この自動車事故の原因は自転車にも同じこと

がいえるのではないだろうか。自動車でも、自転車でも、同じように運転には細心の注意を払わなければならぬ。自分は大丈夫という過信は、大きな事故を招くかもしれない怖くなつた。

家族で自動車や自転車での事故は他にもなかつたか聞いてみた。父も母も高校生の時に自転車運転中に自動車との接触事故があつたと聞いた。二人とも、幸いにも軽傷だけで、大事には至らなかつた。母は、ここから車が来るかもしれないと思いながら自転車を運転する必要があり、周りをよく見て予測することが大切だと言つていた。父は私に「KY活動」という言葉を教えてくれた。「危険予知活動」という意味だそうだ。建設会社に勤める父の業界では安全がとても重要なことらしい。安全に作業を進めるための重要な役割を果たすのがこの「KY活動」だそう。起こるかもしれない危険を予測する。私はそんなことはあまり考えずに自転車に乗っていた。いつ、どこで、どうやつて事故が起きるかはわからない。でも、予測して防止することはできるはずだ。

祖母は夫と息子を交通事故で亡くし、少しでも交通事故がなくなればと、交通安全協会で通学路の安全を守る

ためにボランティアをしている。押しボタン式の横断歩道を通行する中小学生を、黄色のベストを着て、黄色の帽子を被り、黄色の旗を持つて、登校を見守ってくれる。自動車が赤信号、歩行者が青信号になつているのに、猛スピードで通り抜けて行く自動車もいる。「おはよう。いってらっしゃい。」と当たり前のように言つてくれるが、黄色の旗を伸ばしてくれることで事故を防ぐことができ、安心して横断できる。

身近な家族の体験を聞いて、改めて交通事故の恐ろしさを知つた。今、安全に自転車に乗れることができないと感謝するとともに未然に危険を予測すること、無茶な運転をしないことで、自分の身は自分で守らなければならぬと痛感した夏となつた。

審査を終えて

千葉大学名誉教授 鈴木 春男

中学生の部

よく知られているように、交通事故による死者数が一番多かつた昭和四十五年に比べると現在の死者数はその六分の一以下になっています。これは官民が多方面から連携して取り組んでいる交通事故防止対策のすばらしい成果だと見ることができます。しかし他方で、年間三千人近い方々が依然として悲惨な交通事故で亡くなっているという事実にも注目しなければなりません。そしてそうした悲惨な事故を無くすためには国民一人一人が自ら進んで交通安全を守ろうとする自発的な行動が不可欠です。

交通安全ファミリー作文コンクール「中学生の部」は、こうした自発的な交通安全行動を動機づける貴重な場である「家庭・学校・地域」の中で、重要な役割を演じてもらわなければならぬ中学生の意見が伝えられ、本人はもちろん多くの方々に交通安全の重要さに気付いてもらう機会を提供する大事な事業です。今回もそうした事業にご協力いただいたご本人はもちろん、ご父母、ご指導いただいた先生方、またそれぞれの学校などに関係者の方々に心からの感謝を申し上げたいと思います。

本年度、少し残念なのは、応募数が昨年より減少したことです。具体的には、本年度の応募総数は三千三百七点（中学一年生・千二百六十二点、二年生・千二百八十五点、三年生・七百六十点）で、前年度の四千八十九点（中学一年生・千八百三点、二年生・千三百十九点、三年生・九百三十六点、学年不明三十一点）に比べて二割近く減っています。応募作品は、学校を通じて提出されるケースが多いのですが、中学生の間で

もネットで対話をする時代になり、長い文章を書く機会が少なくなっていることの反映かも知れません。しかし多くの中学生がどうしたら交通安全が守られるかを一生懸命考え、作文としてまとめるることは、何よりも自分自身を交通安全に向けて動機づける結果となり、学校における交通安全教育の重要な施策となります。そのことをさらに多くの中学校に理解していただき、協力をお願いすることが重要だと考えています。

今回の審査では、その応募作品の中から、教職経験者や編集経験者、国語の免許取得者等六名の審査員による予備審査を経て、一次審査に中学一年生、二年生、三年生それぞれ十点ずつ計三十点が残され、それを本審査会（七名で構成）審査員が事前に評価して「審査評価集計表」としてまとめ、さらにその「審査評価集計表」をもとに審査員出席の審査会で厳正な審査・討議を重ねました。その結果、最優秀作（内閣総理大臣賞）一点、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）各学年一点計三点、優秀作（文部科学大臣賞）一点、佳作（警察庁交通局長賞）七点が選ばれました。そして、最終的には最優秀作および優秀作は警察庁長官、佳作については警察庁交通局長により決定されました。

最優秀作（内閣総理大臣賞）は、広島県の中学三年生、新田暁さんの「命を守るヘルメット」でした。自転車通学をしている筆者がヘルメットを被る姿を見て、母が生前の祖父を思い出す導入の部分から入り、自動二輪車を安全運転していた祖父が心ないドライバーの右折により重傷を負いながら、ヘルメットのお陰で命は落とさずに済んだことに話が進みます。さらに事故にあうことの悲惨さにも触れながら、ヘルメット着用の重要性が構成の見事さも含めて展開されているすばらしい作品でした。

次に、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）ですが、中学一年生からは香川県の片山ほのかさんの「大切な家族の命を守るために」が選ばれました。交通事故が起きないために何が必要かを家族皆で話し合う場面が丁寧に描かれており、特に警察官である父からの助言をもとに、マナーを守り、余裕をもつて行動することの重要性、さらに自分自身のこととして自転車に乗る際に注意すべきことが述べられているよい作品でした。

中学二年生からは鳥取県の長谷川竣さんの「油断したその先是」が選ばされました。相手の小学一年生が無理やり横断してきたとは言え、自分が自転車で加害者になつた体験を素直な文章で描いていて引き込まれる作品でした。しかも事故を起こした当事者としての噂が広まるという辛い立場も体験し、これからは絶対事故は起こすまいという決意が高まつていく姿がよく描かれていました。

中学三年生からは栃木県の岩佐葵さんの「誰もが交通社会の一員」が選ばれました。自分はルールを守つて自転車に乗つていたのに、無理に合流してきた自動車にぶつけられそうになつた体験から書き始め、それを自分は正しかつたのにと家族に訴えたところ、相手の立場に自分を置いて注意を怠らないことが大事だと説得され、自分のことしか考えていなかつたことを反省する点がよく描かれていました。

優秀作（文部科学大臣賞）には、愛媛県の中学二年生、片桐麻帆さんの「思いやりの注意」が選ばれました。交通安全は相手への思いやりの気持ちから達成されるということが、母の運転する車に同乗して体験した具体的な例をもとに示されていてすばらしいと思いました。本来は相手がなすべき注意を、こちらがしてあげて相手の不注意をカバーすることが大事という母の言葉の引用がとても生きていると感じました。

佳作（警察庁交通局長賞）には以下の七作品が選ばれました。兵庫県の中学一年生、庄司礎さんの「もしあの時ヘルメットがなかつたら……」は、兄の自転車事故を通じて、ヘルメット着用の重要性が自身の気持ちとして示されている作品です。事故の状況が明確に描かれており、そこから自分自身もヘルメット着用はもとより、ハンドルにものをかけないことや、転倒しても安全な服装など、具体的提案がされているのもよいと思いました。

富山県の中学一年生、廣野琥太郎さんの「思いやりをつくる交通安全」は、家族それぞれが交通安全のために気をつけていることが具体的に述べられていて、交通安全を目指した家族交流の姿が目に浮かぶ作品です。また、危険箇所を家族で確認しあつていている点もすばらしいし、思いやりが交通安全に結びつくという結論もすばらしいと感じました。

群馬県の中学一年生、安原思惟さんの「姉の自転車通学と交通安全」は、姉の自転車通学でのヒヤリ体験を材料に家族皆で話し合う温かい雰囲気が感じられる作品です。夜の自転車走行では反射材をつける提案や、通学路を姉と一緒に見直す体験なども描かれ、まさに交通安全は家庭からを実現しているよい作品でした。

東京都の中学二年生、阿部帆夏さんの「とみもまた」は、家族で交通安全のために何が必要かを話し合った結果、わが家の交通ルールとして「とみもまた」という用語が考え出される過程が上手に描かれています。五つの注意事項の必要性が説得的に示され、よく整理されている点も感心しました。

千葉県の中学二年生、小柏奈帆子さんの「安全へ繋ぐささやかな敬意」は、前に住んだ米沢市と今の柏市を比較し、信号のない横断歩道で車が停止する場面を、横断する歩行者の態度という視点から述べている点が特徴的でした。停車した車に手をあげ、感謝の気持ちを示すことが停車率を高めるという発想は素敵でした。

埼玉県の中学三年生、新井広子さんの「一人ひとりから始まるもの」は、自動二輪車で、心ない車からの事故にあつた父から、自転車に乗る際のヘルメットの正しい着用の仕方と身体を守る服装の大しさを教えられたきた中で、交通事故データを分析しながら、そのことの重要性に気づいていく過程が上手に描かれていました。山口県の中学三年生、中村輔さんの「決意の夏」は、祖父を交通事故で亡くし、これまた交通事故で亡くなつた叔父の三十三回忌をこの夏に体験した筆者が、その口惜しさからドライバーの事故原因を追及し、それらは自転車の事故原因にも通じること、特に危険予知が大事なことを学んでいく過程が上手に描かれていました。夫と息子を事故で奪われた祖母が交通安全を願い立哨のボランティアを続けていることにも感銘を受けました。

最後に、数多くの応募作品の読み込みと絞り込みにご尽力いたただいた予備審査員および事務局の方々、さらにはまた本審査会において真剣かつ厳正な審査に当たつていただいた審査員の方々に心からのお礼を申し上げて、審査の報告とさせていただきます。

令和6年度交通安全ファミリー作文コンクール審査員 － 中学生の部 －

(敬称略、順不同)

-
- | | |
|-------|-----------------------------------|
| 鈴木 春男 | 千葉大学名誉教授 |
| 溝端 光雄 | 交通評論家 |
| 吉岡 耀子 | 交通ジャーナリスト |
| 青海 正 | 全日本中学校長会会長 |
| 友竹 明彦 | 公益財団法人三井住友海上福祉財団専務理事 |
| 中園 和貴 | 文部科学省総合教育政策局
男女共同参画共生社会学習・安全課長 |
| 今井 宗雄 | 警察庁交通局交通企画課長 |

※本作品集に掲載する作文は、作者の体験に基づく作品のオリジナリティを尊重する見地から、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

本作品集の転載については、次の条件をいずれも満たす場合に限り認めることとします。

- ①交通安全知識の普及、交通安全思想の高揚のために使用すること。
- ②営利を目的としないこと。
- ③転載誌(紙)等を警察庁交通局交通企画課担当あてに送付すること。

**令和6年度交通安全ファミリー作文コンクール
優秀作品集**

令和7年2月
発行 警察庁
〒100-8974 東京都千代田区霞が関 2-1-2

